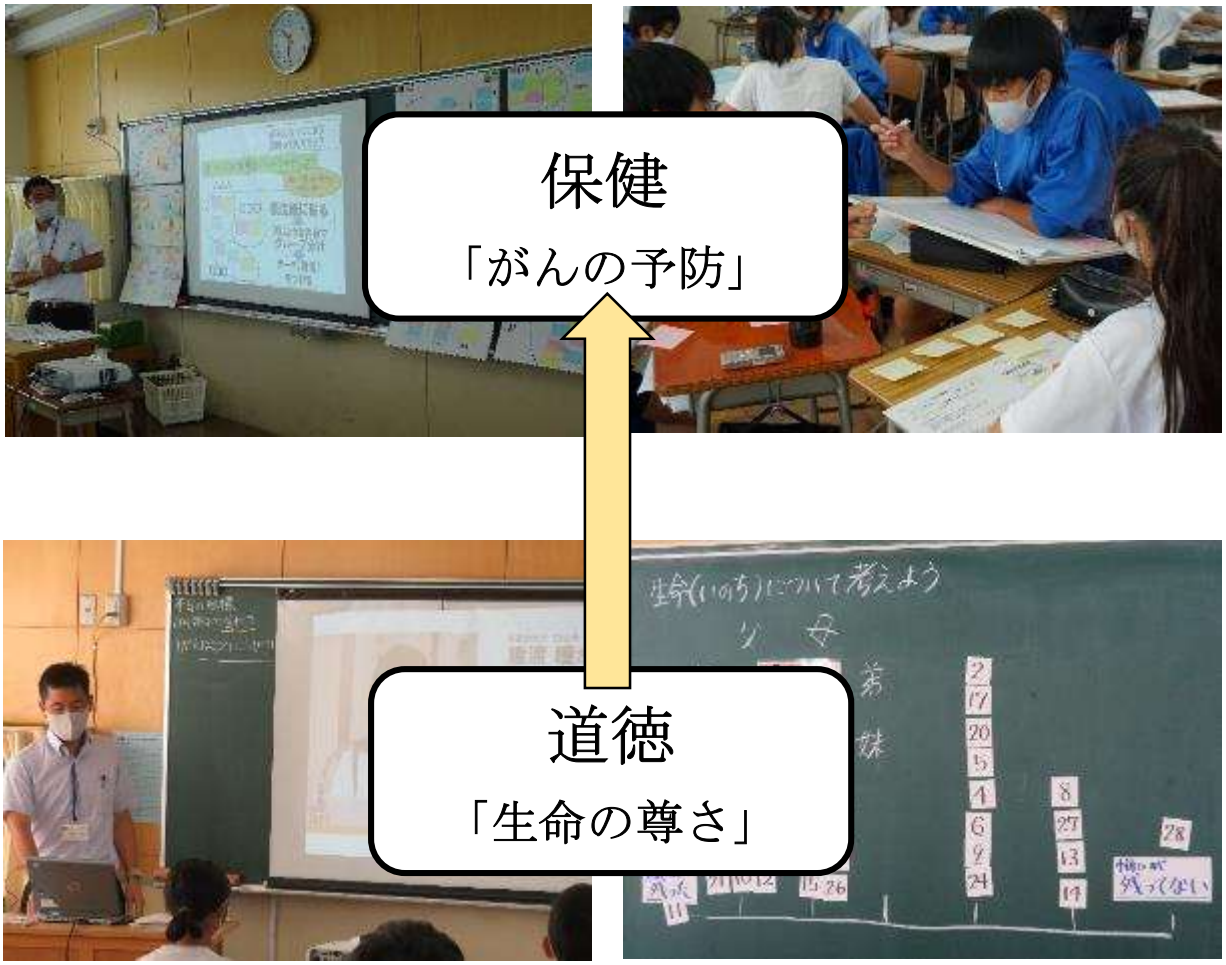
令和２年度

長期研修研究報告詳細版

がんを自分事として考え、
認識を深める保健の授業

－教科等横断的な視点による道徳の授業と関連を図ったがん教育－



神奈川県立総合教育センター

体育指導センター　長期研究員

茅ヶ崎市立西浜中学校　忠隈　一也

目次

第１章　研究を進めるにあたって

１　研究主題・・・

第１章　研究を進めるにあたって

１　研究主題

がんを自分事として考え、認識を深める保健の授業
―教科等横断的な視点による道徳の授業と関連を図ったがん教育―

２　主題設定の理由

日本人の約２人に１人ががんに罹る時代であり、長年にわたり、我が国の死因順位の第１位となっている（厚生労働省　2017　p.1）。そのような中で、児童・生徒が日常生活でがんの話題に触れる機会が増え、がんについての正しい知識と、がん患者への理解がこれからの社会生活で必要となってくると考えられる。

わが国では、平成18年に制定された「がん対策基本法」に基づき、平成24年に「がん対策推進基本計画(第２期)」が施策の新たな分野として加わった。そこでは、「学校での教育のあり方を含め、健康教育全体の中で『がん』教育をどのようにするべきか検討し、検討結果に基づく教育活動の実施を目標とする」（厚生労働省　2012　p.31）ことが示された。

その後、「学校におけるがん教育の在り方について（報告）」（以下、「がん教育の在り方」という）において、「保健体育科を中心に学校の実情に応じて教育活動全体を通じて適切に行うことが大切である」（文部科学省　2015　p.４）と示された。

「中学校学習指導要領（平成29年告示）」（以下、「新指導要領」という）の保健分野の内容の取扱いにおいては、新たに「がんについても取り扱うものとする」（文部科学省　2017a　p.129）と示され、『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説保健体育編』（以下、『新解説保健体育編』という）では、「(ウ)生活習慣病などの予防」に「㋑がんの予防」(文部科学省　2017b　p.211)が新たに明記され、具体的な指導内容が示された。

本県においても、これまで神奈川県がん教育協議（検討）会により、教材の作成や外部講師の活用などを検討してきた。筆者は、本県の取組の１つである「がん教育モデル授業の実践」対象校の教員として、平成27・28年度に、がん教育の授業を実践した。その中では、生徒ががんについて学習し、一定の知識を身に付けたと考えられるが、多くの生徒は「がんの予防」について、「自分事」として考え、認識を深めるまでには至らず、中央教育審議会の「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」で示されている「生きて働く知識（中央教育審議会　2016）」としての習得が十分ではないと感じていた。このことは、がんを授業で扱う際の課題の一つと考えられる。

また、「新指導要領」には、特別の教科道徳(以下、道徳という)の内容として「生命の尊さ」(文部科学省　2017a　p.156)が示されており、『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説特別の教科道徳編』(以下、『新解説道徳編』という)には、「各教科等と道徳科の指導との関連をもたせた学習指導が大切である」(文部科学省　2017c　p.82)と示されている。このことから、教科等横断的な視点で保健と道徳の関連を図った授業を行うことは、「がんの予防」を学ぶ上で有効であると考えられる。

そこで本研究では、「生命の尊さ」に係る心情から学ぶ道徳の授業の後に「がんの予防」を扱う保健の授業を行うことで、がんを自分事として考え、認識を深めることができると考え、本主題を設定した。

また、道徳と関連させた授業づくりのポイントを提案することで、来年度から全面実施する新指導要領に基づく授業づくりに貢献できると考えた。

３　研究の目的

教科等横断的な視点で道徳の授業と関連させ、がんを自分事として考え、認識を深める保健の授業づくりのポイントを提案する。

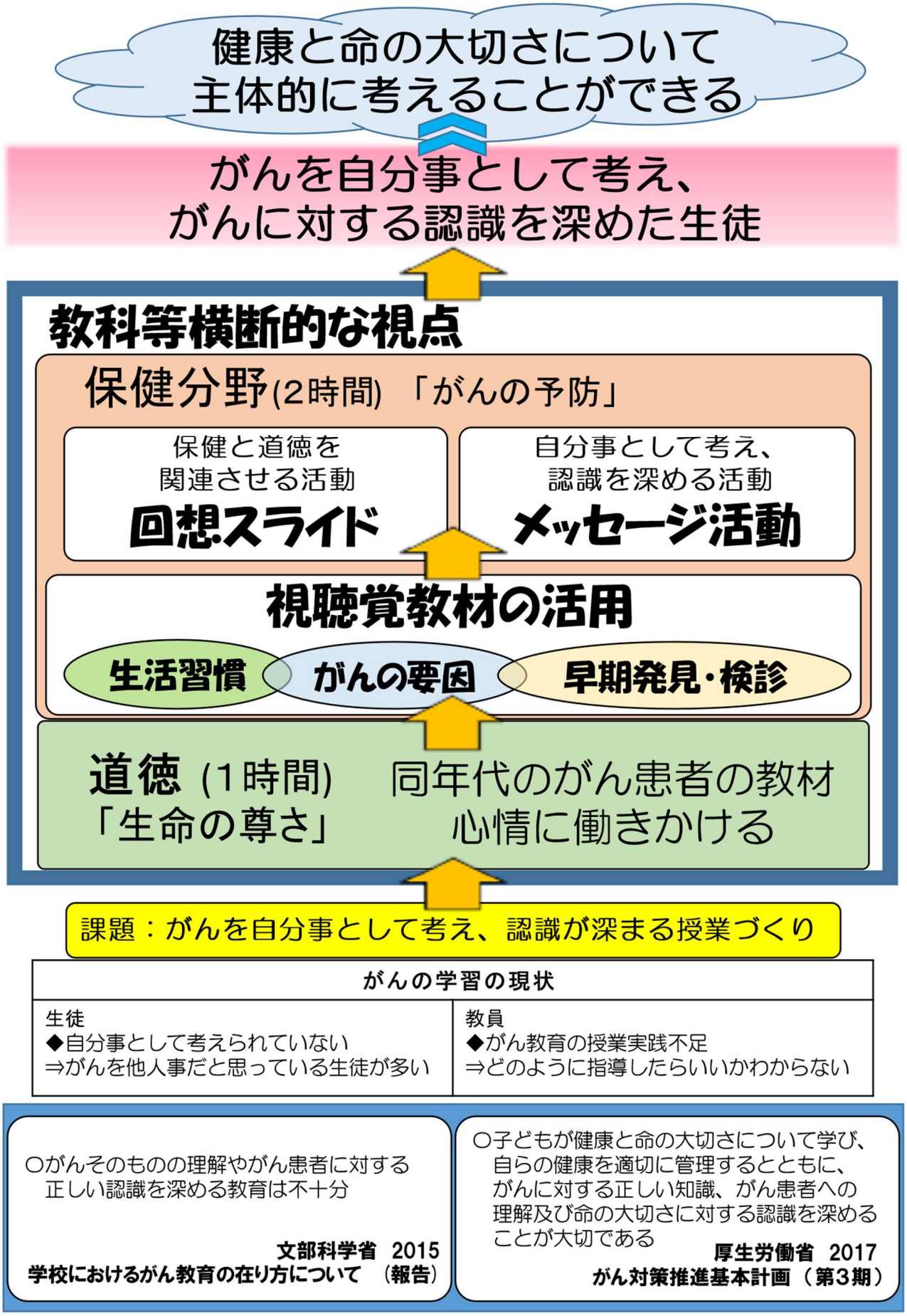
４　研究の仮説

教科等横断的な視点により、道徳の授業「生命の尊さ」で、心情に働きかけた後に、保健の授業「がんの予防」を学習することで、がんを自分事として考え、認識を深めることができるであろう。

５　研究の方法

（１）研究を進めるにあたって、理論研究を行い、仮説を設定する。
（２）理論研究をもとに指導と評価の計画を立て、授業を実践する。
（３）理論研究と仮説検証の結果をもとに研究のまとめを行う。

６　研究の構想図


健康と命の大切さについて
主体的に考えることができる
がんを自分事として考え、
がんに対する認識を深めた生徒
教科等横断的な視点
保健分野(2時間)「がんの予防」
保健と道徳を
関連させる活動
回想スライド
自分事として考え、
認識を深める活動
メッセージ活動
視聴覚教材の活用
生活習慣
がんの要因
早期発見・検診
道徳 (1時間)
「生命の尊さ」
同年代のがん患者の教材
心情に働きかける
課題：がんを自分事として考え、認識が深まる授業づくり
がんの学習の現状
生徒
◆自分事として考えられていない
⇒がんを他人事だと思っている生徒が多い
教員
◆がん教育の授業実践不足
⇒どのように指導したらいいかわからない
○がんそのものの理解やがん患者に対する
正しい認識を深める教育は不十分
文部科学省　2015
学校におけるがん教育の在り方について　（報告）
○子どもが健康と命の大切さについて学び、
自らの健康を適切に管理するとともに、
がんに対する正しい知識、がん患者への
理解及び命の大切さに対する認識を深める
ことが大切である
厚生労働省　2017
がん対策推進基本計画（第3期）

第２章　理論の研究

１　がん教育について

（１）がん教育の変遷

平成19年４月「がん対策基本法」が施行され、同年６月には、同法に基づき、「がん対策推進基本計画（第１期）」が策定（閣議決定）された。その中で、「長期的視点に立ちつつ、平成19年度から平成23年度までの５年間を対象として、がん対策の総合的かつ計画的な推進を図るため、がん対策の基本的方向について定めるとともに、都道府県がん対策推進計画の基本となるものである」（厚生労働省　2007）と示されている。

また、平成24年６月に施行された「がん対策推進基本計画（第２期）」において、全体目標に対して、さらに細かな目標が設定され、その中に「がんの教育・普及啓発」（厚生労働省　2012 p. 30）が明記され、がん教育を推進していくこととなった。

平成29年10月に施行された「がん対策推進基本計画（第３期）」では、がん教育の普及・啓発のために、「子どもが健康と命の大切さについて学び、自らの健康を適切に管理するとともに、がんに対する正しい知識、がん患者への理解及び命の大切さに対する認識を深めることが大切である」（厚生労働省　2017　p. 73）としており、教育現場におけるがん教育の必要性が示され、一層の推進が求められている。

（２）学校におけるがん教育の基本的な考え方

学校におけるがん教育の基本的な考え方については、「がん教育の在り方」において、次のように示されている。

ア　がん教育の定義

がん教育は、健康教育の一環として、がんについての正しい理解と、がん患者や家族などのがんと向き合う人々に対する共感的な理解を深めることを通して、自他の健康と命の大切さについて学び、共に生きる社会づくりに寄与する資質や能力の育成を図る教育である。

（文部科学省　2015　p. ２）

イ　がん教育の目標

①　がんについて正しく理解することができるようにする がんが身近な病気であることや、がんの予防、早期発見・検診等について関心をもち、正しい知識を身に付け、適切に対処できる実践力を育成する。また、がんを通じて様々な病気についても理解を深め、健康の保持増進に資する。 ②　健康と命の大切さについて主体的に考えることができるようにする がんについて学ぶことや、がんと向き合う人々と触れ合うことを通じて、自他の健康と命の大切さに気付き、自己の在り方や生き方を考え、共に生きる社会づくりを目指す態度を育成する。

（文部科学省　2015　p. ２）

また、同報告には、表１の内容が例示されており、保健体育（保健分野）で学ぶべき内容や、道徳で扱うことが可能な内容となっている。

表１　がん教育の学習内容

ア　がんとは（がんの要因）
イ　がんの種類とその経過
ウ　我が国のがんの状況
エ　がんの予防
オ　がんの早期発見・がん検診
カ　がんの治療法
キ　がん治療における緩和ケア
ク　がん患者の生活の質
ケ　がん患者への理解と共生

（文部科学省　2015　pp. ２－４）

本研究では、表１「がん教育の学習内容」に示されている中から、ア～オにおいては保健分野で、ケにおいては道徳で扱った。「がん教育の在り方」では、これらを扱う際の留意点として「ア～ケの内容を適宜関連付けて、理解できるようする。また、それぞれの内容に関連付けて、一次予防（生活習慣の改善等）、二次予防（がん検診等）について理解できるようにする。」（文部科学省　2015　p. ４）と示されており、本研究では関連付けるために教科等横断的な視点で授業を計画した。なお、表１の（カ）～（ク）の内容については、新解説保健体育編に具体的な指導内容の記載が無いため、実施しなかった。

（３）発達段階に応じたがん教育について

「がん教育の在り方」では、がん教育を実施する上で、発達段階を踏まえた指導が必要であるとしており、小学校、中学校、高等学校で指導する内容を系統的に指導する必要があるとしている（文部科学省　2015　p. ４）。

また、植田は、がん教育の展開例として表２のように示している。

表２　がん教育の展開例

学校種	小学校		中学校		高等学校	
学習内容＼機会	保健教育	道徳・特活*1	保健教育	道徳・特活*1	保健教育	特活*1
ア）がんとは何か	◎	◎	◎		◎	
イ）我が国のがんの現状	○	○	◎		◎	
ウ）がんの予防	○	○	◎		◎	
エ）がんの早期発見・検診	○	△	◎		◎	
オ）がんの治療法		○	△	(○)	◎	(○)
カ）がん治療における緩和ケア		○		(○*2)	◎	(○*2)
キ）がん患者の生活の質		○		○	○	(○)
ク）がん患者の理解と共生		○		○	○	(○)

※表中の記号は次のことを表す。◎：重点をおく、○：扱う、△：触れる
小児がんについてはすべての校種で配慮する。
＊１　特活は特別活動の略
＊２　可能であれば扱う

（植田　2018　p. 54）

表２においては、表１に記載されている「ア　がんとは（がんの要因）」と「イ　がんの種類とその経過」をまとめて「ア）がんとは何か」として記載している。

本研究においては、植田らが示している表２の中の、ア）～エ）を保健の授業で扱い、ク）の内容については、道徳の授業で触れることとした。

（４）今日的な「がん教育の課題」について

「がん教育の在り方」では、「近年、疾病構造の変化や高齢社会など、児童生徒を取り巻く社会環境や生活環境が大きく変化してきており、健康教育もそれに対応したものであることが求められる。特に、日本人の死亡原因として最も多いがんについて、がんそのものの理解やがん患者に対する正しい認識を深める教育は不十分であると指摘されている。学校教育を通じてがんについて学ぶことにより、健康に対する関心をもち、正しく理解し、適切な態度や行動をとることができるようにすることが求められている。」（文部科学省　2015　p. １）と、学校教育を通じてがんについて学ぶことの意義を示している。

また、植田らは、児童・生徒のがん教育の課題として「がんに対する不安が認められること、そして小児がんの子どもたちへの教師の理解や友達の励ましが大きな支えになる一方で、不用意な言葉や態度がいじめや差別にもつながる」（植田　2018　p. ８）と踏まえた上で、それらを払拭するために、次の目標が必要であると示している。

> 「学校におけるがん教育の目標は、がんの疾病概念、予防方法、検診の意義を正しく理解し、がんを予防する能力や態度を高め、がんに対するいたずらな不安や偏見を払拭する。
> また、人間尊重の精神（やソーシャルインクルージョンの考え方）に基づき、がんやがんと向き合う人々について学ぶことによって、自他の健康と命の大切さを知るとともに自己のあり方や生き方を考える態度を育成する。」

（植田　2018　p. ８）

学校教育において、がんについて正しい理解を深めることで、がん患者やその家族などと向き合う人々に対する見方・考え方が変化し、これからの社会の中で活用することができる実践力を育むことができると考える。また、本研究の授業では、がんを身近なものとしてとらえ、自分や身近な人が「がんになってしまったら」や「がんにならないために」を考えることで、自己の在り方や、相手に対する接し方を考え、行動や態度にいかすことができると考えた。

２　中学校学習指導要領（平成29年告示）解説保健体育編における「がんの予防」について

「新指導要領」において、新たに「がんについても取り扱うものとする」（文部科学省　2017a p. 129）と示され、『新解説保健体育編』においても、「保健分野　２ 内容　健康な生活と疾病の予防（ウ）生活習慣病などの予防」に「㋑　がんの予防」（文部科学省　2017b　p. 211）が新たに明記され、具体的な指導内容が例示された。

> ㋑　がんの予防
> がんは，異常な細胞であるがん細胞が増殖する疾病であり，その要因には不適切な生活習慣をはじめ様々なものがあることを理解できるようにする。
> また，がんの予防には，生活習慣病の予防と同様に，適切な生活習慣を身に付けることなどが有効であることを理解できるようにする。
>
> なお、㋐、㋑の内容と関連させて，健康診断やがん検診などで早期に異常を発見できることなどを取り上げ，疾病の回復についても触れるように配慮するものとする。

（文部科学省　2017b　p. 211）

※㋐とは「生活習慣病の予防」のことである。

さらに、「新指導要領」には、「保健分野の指導に際しては、自他の健康に関心を持てるようにし、健康に関する課題を解決する学習活動を取り入れるなどの指導方法の工夫を行うものとする」（文部科学省　2017a　p.129）との記載がある。本研究の授業では、同年代のがん患者を扱った道徳の授業を行った後に、保健の授業「がんの予防」を行い、将来の自分や身近な人の生活習慣の課題を考え、解決するための活動（メッセージ活動（p.22参照）を含む）を通して、自他の健康課題について考え、解決しようとする力が身に付くであろうと考えた。

３　特別の教科道徳における「生命の尊さ」について

本研究においては、「がん教育の在り方」の学校におけるがん教育の目標に示されている、「②健康と命の大切さについて主体的に考えることができるようにする」（文部科学省　2015　p.２）と照らし合わせて、「新指導要領」に示されている「D（19）生命の尊さ」を取り扱うこととした。内容の記述には「生命の尊さについて、その連続性や有限性なども含めて理解し、かけがえのない生命を尊重すること」（文部科学省　2017a　p.156）と示されている。

さらに、『新解説道徳編』には、「近年、生徒の生活様式も変化し、自然や人間との関わりの希薄さから、生命あるものとの接触が少なくなり、生命の尊さについて考える機会を失いつつある。（中略）身近な人の死に接したり、人間の生命の有限さやかけがえのなさに心を揺り動かされたりする経験をもつことも少なくなっている。このことが、生命軽視の軽はずみな言動につながり、いじめなどの社会的な問題となることもある。」（文部科学省　2017c　p.62）と示されており、道徳的価値を育むことが必要であるとしている。

がんの話題に触れる機会が増えてきた社会の中で、がんと向き合う学習を通して、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、がんという疾病を通して「生命の尊さ」を考える学習になると考えた。

４　がんを自分事として考え、認識が深まることについて

「新指導要領」には、保健分野の目標のひとつに、「健康についての自他の課題を発見し、よりよい解決に向けて思考し判断するとともに、他者に伝える力を養う」（文部科学省　2017a　p.126）と示されており、自他の健康課題に関心を持ち、学習する内容を自分事として考え、よりよい解決に向けて思考し、実践できる力が求められている。

『新解説道徳編』に、「中学生の時期は、比較的健康に毎日を過ごせる場合が多いため、自己の生命に対する有り難みを感じている生徒は決して多いとは言えない」（文部科学省　2017c　p.62）と示されており、筆者も、これまでの授業を通して感じていることとして重なる部分でもあった。

よって、生徒は、がんについて身近な健康課題として実感がわかず、自分とはかけ離れた問題としてとらえている生徒もいると考えられる。そこで、がんに係る学習課題が生徒にとって他人事ではなく、「自分事」となることが重要であると考えた。自分事としてとらえられる学習課題を設定することで、生徒は自分事として考え、がんの知識の習得や、がん患者への理解、生命の大切さに対する認識を深めることができると考えた。

本研究における「自分事」については「周囲の大切な人を含めた、自分自身の生活に関わること」と定義した。

５　教科等横断的な視点について

「がん教育の在り方」に、がん教育の目標として「がんについて正しく理解することができるようにする」、「健康と命の大切さについて主体的に考えることができるようにする」（文部科学省　2015　p.２）と示されている。本研究では、この目標をねらいとし、保健「がんの予防」では、がん

に係る正しい知識について、道徳「生命の尊さ」では、健康と命の大切さについて取り扱うこととした。

また、『新解説道徳編』では、「各教科等における学習と道徳科の指導のねらいが同じ方向をもつものである場合、学習の時期や教材を考慮したり、相互に連携を図ったりした指導を進めると、指導の効果を一層高めることが期待できる」（文部科学省　2017c　p.83）と示され、『新解説保健体育編』においても、「体育・健康に関する指導は、保健体育科の時間だけではなく技術・家庭科や特別活動のほか、関連の教科や道徳科、総合的な学習の時間なども含めた学校の教育活動全体を通じて行うことによって、その一層の充実を図ることができる」（文部科学省　2017b　p.245）と示されている。このことから、保健体育と道徳を教科等横断的な視点で授業を行うことが有効であると考えた。

よって、本研究では、保健「がんの予防」と道徳「生命の尊さ」を教科等横断的な視点で関連させた学習を計画し、ひとまとまりの内容として実施することで、指導の効果を一層高めることができると考えた。

がんを自分事として結び付けるための主な活動として、道徳の授業では、同年代のがん患者を教材として活用し、生命の大切さについて考える授業を行った（p.15参照）。保健の授業では、小児がんと一般的ながんを区別するための学習や、道徳で学んだことを想起させる活動を計画し、授業を実施した（p.19参照）。

※本校では、道徳の授業は担任が担当しているが、本研究では筆者が３つのクラスで保健と合わせ、道徳の授業も行った。『新解説道徳編』では、「年に数回、教師が交代で学年の全学級を回って道徳の授業を行うといった取組も効果的である。（中略）学級担任が自分の学級の授業を参観することが可能となり、普段の授業とは違う角度から生徒の新たな一面を発見することができる」（文部科学省　2017c　p.114）と示されており、生徒の学習状況や生徒の様子をより多面的・多角的に見ることができ、生徒の実態把握にも有効であると考えられる。

６　がん教育で配慮を必要とする生徒への対応について

「がん教育の在り方」では、がん教育で配慮が必要な事項について次のように示されている。

> **がん教育で配慮が必要な事項について**
>
> がん教育の実施に当たっては、授業の実施前までに以下のような事例に該当する児童生徒等の存在が把握できない場合についても授業を展開する上で配慮が求められる。
>
> ・小児がんの当事者、小児がんにかかったことのある児童生徒等がいる場合。
> ・家族にがん患者がいる児童生徒等や、家族をがんで亡くした児童生徒等がいる場合。
> ・生活習慣が主な原因とならないがんもあることから、特に、これらのがん患者が身近にいる場合。
> ・がんに限らず、重病・難病等にかかったことのある児童生徒等や、家族に該当患者がいたり家族を亡くしたりした児童生徒等がいる場合。

（文部科学省　2015　p.５）

これを受け、本研究では、授業の実施に当たり、事前に各家庭に向けて、がんについて学習する案内（資料編p.38参照）を配付するとともに、養護教諭と連携し、配慮が必要な生徒を把握し、適切に対応できるよう計画した。

第３章　検証授業

１　検証授業

（１）期間

令和２年９月11日（金）～９月25日（金）３時間扱い（50分授業）

（２）場所

茅ヶ崎市立西浜中学校　教室及び視聴覚教室

（３）授業者

茅ヶ崎市立西浜中学校　教諭　忠隈一也（筆者）

（４）対象

第２学年　１組（28名）、２組（28名）、３組（29名）

（５）単元名

特別の教科道徳　D　主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること
(19)生命の尊さ

保健分野　健康な生活と疾病の予防　(ｳ)生活習慣病などの予防　「㋑がんの予防」

（６）主なデータの収集方法

ア　アンケート調査

（ア）　実態調査アンケート　　７月10日（金）

（イ）　事前アンケート　　９月９日（水）

（ウ）　事後アンケート　　10月２日（金）

イ　理解度チェック

（ア）　事前の理解度チェック　９月９日（水）

（イ）　事後の理解度チェック　10月２日（金）

ウ　道徳・保健ワークシート

（ア）　ワークシートの記述

（イ）　メッセージ活動

（７）仮説と検証の視点と方法

＜仮説＞

教科等横断的な視点により、道徳の授業「生命の尊さ」で、心情に働きかけた後に、保健の授業「がんの予防」を学習することで、がんを自分事として考え、認識を深めることができるであろう。

＜検証の視点と方法＞

ア　生徒は道徳の授業をどのようにとらえたか

具体的な視点	手がかり	質問内容等
道徳の授業をどのようにとらえたか	事前アンケート 事後アンケート	質問：「『道徳の授業』に興味・関心をもって取り組めた」（４件法） 質問：「『道徳の授業』は、自分にとって役に立つものだ」（４件法）
	事後アンケート	質問：「生命の大切さについて深く考えることができた」（４件法） 質問：「新たな気づきや発見があった」（４件法）
	道徳ワークシート	質問：「自分の考えを深めることができた」（４件法） 質問：「今日の授業を通して、生命《いのち》についてどのように考えましたか？」（自由記述）

イ　生徒は保健の授業をどのようにとらえたか

（ア）保健の授業をどのようにとらえたか	事前アンケート 事後アンケート	質問：「『保健の授業』に興味・関心をもって取り組めた」（４件法） 質問：「『保健の授業』は、自分にとって役に立つものだ」（４件法） 質問：「『保健の授業』は、健康な生活を送るために重要だ」（４件法）
	事後アンケート	質問：「『保健の授業』について深く考えることができた」（４件法） 質問：「新たな気づきや発見があった」（４件法） 質問：「今回の授業に関連することで、『もっと知りたい』と思った部分（内容）があった」（４件法） 「選んだ理由を書いてください」（自由記述）
（イ）道徳の後の保健の授業が有効に機能したか	事後アンケート	質問：「がんについての学習を、道徳と保健の授業を関連させて行いました。３時間の授業を終えてみて、道徳で学んだことを、保健の学習に生かすことができましたか？」（４件法） 「その理由について教えてください」 （自由記述）

ウ　生徒はがんを自分事として考え、認識を深めることができたか

具体的な視点	手がかり	質問内容等
（ア）がんを自分事として考えることができるための基となる知識が習得できたか ※自分事として考えるためには、知識の定着が必要不可欠だと考え、設定した。	事前・事後に理解度チェックとして実施	●がんの病気の特性を理解できたか 質問：「がんは、日本の死因の第（__）位である」 質問：「日本人の約（__）人に一人が、がんになる」 質問：「日本では、がんで亡くなる人は、約（__）人に一人である」 質問：「がんの主な発生原因は（__）である。※これを改善するだけで、がん発生の約６割は予防できるとされています」 ●がんの予防に必要な知識を理解できたか 質問：「がんと診断されるがんの大きさは約（__）cmからである」 質問：「がんを早期発見、早期（__）すると、約95％に人が治る」 質問：「がんの早期発見のためには、（__）が有効である」 質問：「小児がんになる確率は、すべてのがんのうちの（__）％以下と、とてもまれである」
（イ）がんを自分事として考え、認識を深めることができたか	事前アンケート 事後アンケート	質問：「がんは自分に関係のある病気なので学ぶ必要がある」（４件法）
	事前アンケート 事後アンケート	質問：「定期的に健康診断を受けようと思う」（４件法） 質問：「がん検診を受けられる年齢になったら、検診を受けようと思う」（４件法）
	事前アンケート 事後アンケート	質問：「自分の心がけや努力によって、がんを予防することができる」（４件法）
	道徳ワークシート 保健ワークシート （保健の１・２時間目）	質問：「身近な人に、今日の授業のことを話そうと思いますか」（４件法） 「『そう思う』『どちらかというとそう思う』と回答した人に伺います。誰にどのようなこと（内容）を伝えたいと思いましたか」（自由記述）
	事後アンケート	質問：「『がんの予防』を自分事として考えることができた」（４件法） ※自分事とは、他人事ではなく自分に関係のある事。家族などの自分にとって大切な人について考えることも、ここでは「自分事として考えること」とします。
	メッセージ活動 （事前アンケート時、最後の保健授業の振り返りの中で実施）	「命を守るためのがんの予防とがんとの付き合い方について大切な人にメッセージを書こう」のメッセージから、認識の深まりを検討する。 ※「大切な人」に関しては、以下の３つのパターンから選択させることとした。 ・父　・母　・大人になった自分

２　学習指導計画

（１）単元の目標（保健）

ア　健康な生活と生活習慣病などの予防について、理解することができるようにする。

イ　生活習慣病などの予防に関わる事象や情報から自他の課題を発見し、生活習慣病などのリスクを軽減したり、生活の質を高めたりする視点から解決方法を考え、適切な方法を選択するとともに、それらを伝え合うことができるようにする。

ウ　生活習慣病などの予防について、自他の健康の保持増進や回復についての学習に自主的に取り組もうとすることができるようにする。

（２）評価の観点及び趣旨（保健）

観点	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
趣旨	健康な生活と疾病の予防、心身の機能の発達と心の健康、傷害の防止、健康と環境について、個人生活を中心として科学的に理解しているとともに、基本的な技能を身に付けている。	健康な生活と疾病の予防、心身の機能の発達と心の健康、傷害の防止、健康と環境について、個人生活における健康に関する課題を発見し、その解決を目指して科学的に思考して判断しているとともに、それらを他者に伝えている。	健康な生活と疾病の予防、心身の機能の発達と心の健康、傷害の防止、健康と環境について、自他の健康の保持増進や回復についての学習に自主的に取り組もうとしている。

（文部科学省　2020　p. 117）

（３）内容のまとまりごとの評価規準（保健）

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①　生活習慣病などは、運動不足、食事の量や質の偏り、休養や睡眠の不足などの生活習慣の乱れが主な要因となって起こること。また、生活習慣病の多くは、適切な運動、食事、休養及び睡眠の調和のとれた生活を実践することによって予防できることを理解している。	①　健康な生活と疾病の予防について、課題を発見し、その解決に向けて思考し判断しているとともに、それらを表現している。	①　健康な生活と疾病の予防についての学習に自主的に取り組もうとしている。

（文部科学省　2020　pp. 117-118）

（４）単元の評価規準（保健）

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①運動不足、食事の量や質の偏り、休養や睡眠の不足、喫煙、過度の飲酒などの不適切な生活行動を若い年代から続けることによって、やせや肥満、心臓や脳で動脈硬化が起こること、歯肉に炎症等が起こること、歯を支える組織が損傷することなど様々な生活習慣病のリスクが高まることについて、理解したことを言ったり書いたりしている。 ②生活習慣病は日常の生活習慣が要因となって起こる疾病であり、適切な対策を講ずることにより心臓病、脳血管疾患、歯周病などを予防できることについて理解したことや、生活習慣病を予防するには、適度な運動を定期的に行うこと、毎日の食事における量や頻度、栄養素のバランスを整えること、喫煙や過度の飲酒をしないこと、口腔の衛生を保つことなどの生活習慣を身に付けることが有効であることについて、理解したことを言ったり書いたりしている。 ③がんは、異常な細胞であるがん細胞が増殖する疾病であり、その要因には不適切な生活習慣をはじめ様々なものがあることについて、理解したことを言ったり書いたりしている。 ④がんの予防には、生活習慣病の予防と同様に、適切な生活習慣を身に付けることなどが有効であることについて、理解したことを言ったり書いたりしている。	①生活習慣病の予防における事柄や情報などについて、原則や概念を基に整理したり、個人生活と関連付けたりして、自他の課題を発見するとともに、習得した知識を活用し、生活習慣病を予防するための方法を選択している。 ②生活習慣病などの予防について、疾病等にかかるリスクを軽減し健康を保持増進する方法を考え、選択した理由などを、他者と話し合ったり、ノートなどに記述したりして、筋道を立てて伝え合っている。	①生活習慣病などの予防について、課題の解決に向けての学習に自主的に取り組もうとしている。

（文部科学省　2020　p. 94）

本研究の授業においては、単元の評価規準の「知識・技能」①、②は、前段の「生活習慣病などの予防」の授業で評価することとした。

（５） 単元の概要（学習過程）

時間	1	2	3
教科	道徳	保健体育（保健分野）	保健体育（保健分野）
単元	生命の尊さ	（ウ）生活習慣病などの予防　㋑がんの予防	
新指導要領解説の記載内容	生命の尊さについて、その連続性や有限性なども含めて理解し、かけがえのない生命を尊重すること。	がんは、異常な細胞であるがん細胞が増殖する疾病であり、その要因には不適切な生活習慣をはじめ様々なものがあることを理解できるようにする。	がんの予防には、生活習慣病の予防と同様に、適切な生活習慣を身に付けることなどが有効であることを理解できるようにする。
		なお、㋐（生活習慣病の予防）、㋑（がんの予防）の内容と関連させて、健康診断やがん検診などで早期に異常を発見できることなどを取り上げ、疾病の回復についても触れるように配慮するものとする。	
０	出欠確認 １、本時のねらいを把握する。	出欠確認 １、本時の学習課題について考える。	出欠確認 １、本時の学習課題について考える。
５ １０ １５ ２０ ２５ ３０ ３５ ４０ ４５	２、猿渡瞳さんについて紹介し、動画を視聴する。 （１）動画の内容について考える。 ○作文を読んで、一番心に残ったことは何かな？ （２）瞳さんを自分に置き換えて考える。 ○自分ががんと宣告されたらどんな気持ちになるだろう？ ３、家族の心情を考えよう。 ○あなたが瞳さんの家族だったら、がんの宣告を受けてどのように考え、どのように行動したいですか？ ４、メッセージに込められた思いを考えよう。 ○瞳さんは、「悔いのない人生を送ったと思いますか？」 ○自分にとっての「悔いのない人生ってどんな人生？」	【ねらい】 ・がんがどのような病気か理解する！ ・がんの発生要因を考えよう！ ２、がんがどのような病気か理解しよう。 ○がんってどんな病気だろう？ （１）小児がんについて （２）日本のがんの現状について （３）がんができるしくみについて ３、がんの要因について考えよう。 ○がんになってしまう要因って何だろう？ （１）がんになってしまう要因について個人で考え、グループで話し合う。 （グループワーク） （２）がんを予防するために、自分や身近な人が気を付けることについて考える。 （ワークシートに記入）	【ねらい】 ・がんを予防するためにできることを考えよう。 ・がんとの付き合い方について考えよう。 ２、がんを予防するためにできることを考えよう。 （１）日本人におけるがんの要因について （２）前時に個人と班で考えたものが当てはまっているか確認する。 ３、がんとの付き合い方について考えよう。 ○がんから命を守るためには生活習慣だけ見直せばいいのか？ （１）早期発見について （２）日本のがん検診の受診率について ○なぜ日本のがん検診の「受診率」は低いの？ ４、３時間の授業を振り返る。 （回想スライド） ５、がんの予防に向けたメッセージを書こう。 ○命を守るためのがんの予防とがんの付き合い方について大切な人にメッセージを書こう。
５０	５、本時のまとめをする。 ○今日の授業を通して、「生命（いのち）」についてどのように考えましたか？	４、本時のまとめをする。 自己評価・振り返り 次時の確認	４、本時のまとめをする。 自己評価・振り返り 次時の確認
知･技		③	④
思･判･表		①	②
主態		① ※前半の単元（生活習慣病の予防）から継続して評価する	

３　学習指導の工夫

（１）道徳「生命の尊さ」を学ぶ教材

がんを自分事としてとらえる学習となるように、同年代のがん患者の教材を活用し、自身と照らし合わせ、生命の大切さについて考えることをねらいとした。よって、研究の副題にもある、「道徳の時間と関連を図る」ことで、目指す生徒像（がんを自分事として考え、認識を深めた生徒）に迫ると考え、心情に訴える道徳の授業「生命の尊さ」を行ってから保健の授業「がんの予防」を行うこととした。

本研究における道徳の授業では、物部らの「各校種におけるがん教育の展開例」（物部・杉崎 2018）に記載されている同年代のがん患者を教材として活用した。

「がん教育の在り方」には、がん教育の定義として、「がんについての正しい知識と、がん患者や家族などのがんと向き合う人々に対する共感的な理解を深めることを通して、自他の健康と命の大切さについて学び、共に生きる社会づくりに寄与する資質や能力の育成を図る教育である」（文部科学省　2015　p.２）と示されており、がんと向き合う人々への理解を通して、生命の尊さについて学習することができる教材であると考え、活用した。

本教材の概要

○同年代のがん患者（猿渡瞳さん）について

猿渡瞳さんは、11歳という若さで、右大腿骨骨肉腫を患い、わずか13歳で生涯を閉じた（当時、福岡県大牟田市立田隈中学校２年生）。小学校６年生の時に骨肉腫が見つかり、既に肺にも転移、医師から「余命半年」を宣告されたが、絶対に治ることを信じ、生きるための希望に向かって１年９か月もの間、がんと正面から闘い続けた。亡くなる２か月前には、弁論大会で「命を見つめて」という題で、命の大切さについての作文を発表した。

○具体の教材について

＜ＤＶＤ＞

瞳さんが弁論大会で発表した時の写真や音声が収録された、臨場感のある動画である。母親の直美さんとのインタビューも収録されており、瞳さんの闘病生活に係る話から、がん患者の家族や周囲の人が支え合うことの大切さがわかる内容である。

＜作文＞

作文には、生きる希望を失わずに病気と必死に闘ってきたこと、闘病生活の中で普通に生きることの幸せを知ったこと、苦しい中でも前向きに生きることが大切であることなどが書かれており、生命の尊さを考えることができる内容である。

※上記の２枚の写真は、株式会社サン・エデュケーショナルのウェブページ（http://sun-edu.co.jp/gan_wo_manabou/gan_wo_manabou.htm　2021年１月９日）より引用。

なお、道徳の授業で活用した教材は次のとおりである。

作文「命を見つめて」（植田誠治編著、物部博文、杉崎弘周著 『学校におけるがん教育の考え方・進め方』大修館書店）
ＤＶＤ『いのちと向き合うがんを学ぼう②がんを通して〈命〉を考える』 （植田誠治監修　株式会社サン・エデュケーショナル）

（２）保健「がんの予防」を学ぶ教材

本研究では、がんについて生徒が学びやすくなるように、次の視聴覚教材（資料）を活用した。

ア　スライド教材

（ア）神奈川県健康医療局保健医療部がん・疾病対策課作成

「がんを知ろう！」スライド教材

図１　保健の授業（１時間目）でスライドを活用している場面

活用した資料の内容

【保健の１時間目】

・「がんになる人は、何人に１人？」　　・「がんで亡くなる人は、何人に１人？」

・「がんって何だろう？」

※（https://www.pref.kanagawa.jp/docs/nf5/ganntaisaku/ken-torikumi/gann-kyouiku.html 2021年１月９日現在）より閲覧可能。

（イ）文部科学省「がん教育推進のための教材」中学校・高等学校版　スライド教材

図２　保健の授業（１・２時間目）でスライドを活用している場面

活用した資料の内容

【保健の１時間目】

・「がんは体のどこにできるだろう」

・「がんの進行と、自覚症状が出るまで」

【保健の２時間目】

・「がんの進行と５年生存率の関係」

・「がん検診の種類」

※（https://www.mext.go.jp/a_menu/kenko/hoken/1385781.htm　2021年１月９日現在）よりダウンロード可能。

（ウ）国立がん研究センター　がん情報サービスより

図３　保健の授業（２時間目）でスライドを活用している場面

活用した資料の内容

【保健の２時間目】

・「５つの健康習慣を実施することでがんになるリスクが低くなります」

・「がんのリスクがどれくらい低くなるか」

・「日本人におけるがんの要因」（スライド資料・配付資料として活用）

・「がんのリスク・予防要因」（配付資料として活用）

※（https://ganjoho.jp/public/pre_scr/index.html　2021年１月９日現在）より閲覧可能。

本研究の保健の授業では、「がんの予防」の知識習得のために、講義の場面において、表１（p.５）で示されているア～オについて学習した。その際、同ページに記載してある、「一次予防」「二次予防」という言葉は使用せず、「生活習慣の改善」と「健康診断・がん検診」の二つを軸に学習することとした。

なお、「一次予防」「二次予防」を使用しない理由として、神奈川県健康医療局保健医療部がん・疾病対策課作成「がんを知ろう！」のスライド教材において、この表現はしておらず、統一して使用しないこととした。

イ　ＤＶＤ教材

（ア）日本対がん協会作成『がんって、なに？』

図４　保健の授業（１・２時間目）で活用している場面

活用した動画の内容

【保健の１時間目】
・第２話「がんって、なに？」

【保健の２時間目】
・第６話「がんの早期発見（１）」
・第７話「がんの早期発見（２）」

※（http://www.jcancer.jp/cancer-education/index.html　2021年１月９日現在）より購入可能。

（イ）植田誠治監修『いのちと向き合うがんを学ぼう②がんを通して〈命〉を考える』

小児がんを学習する教材（ＤＶＤ）として活用した。

がんについて学習する際、原因がほとんどわかっていない「小児がん」と成人になってから罹患する「一般的ながん」を分けて教える必要があると考えた。この動画では、小児がんと骨肉腫について医師（小児外科医）が説明している動画である。（約２分）

また、動画を活用することで、生徒が興味・関心をもって視聴するであろうと考え、活用した。

※ＤＶＤの詳細は、p.15参照。

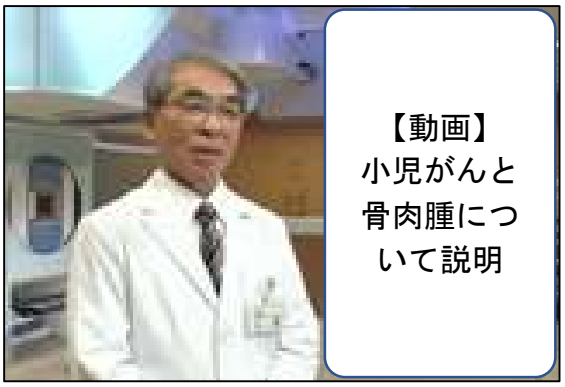


図５　保健の授業（１時間目）で活用した動画資料

ウ　映像資料　保険会社ＣＭ

保健の授業の２時間目に、「早期発見・早期治療」について学ぶ際の導入として活用した。

「早期発見・早期治療」の導入として、本ＣＭを活用した。若くしてがんを経験したプロ野球選手が、がんの早期発見・早期治療の重要性を啓発するＣＭである。

プロとして現役で活躍している選手であり、がんはいつ発見されるかわからない、誰にでもなる可能性があることを改めて伝えた。

また、検診の必要性と、早期発見・早期治療で元の生活に戻ることができる可能性が高いことが伝わるＣＭだと考え、活用した。

図６　早期発見・早期治療について説明する際の導入時で使用した動画

※ＴＶのＣＭを録画して活用した。

（３）保健の授業における道徳の授業との関連の図り方

本研究の要である、教科等横断的な視点で道徳と保健を結び付けるために、次の工夫を行った。

ア　保健の授業導入での振り返り

道徳と保健を関連させるために、保健の授業導入時において、道徳の授業で学んだことを振り返ることで、前時の授業の学習内容を再確認できると考え、実施した。

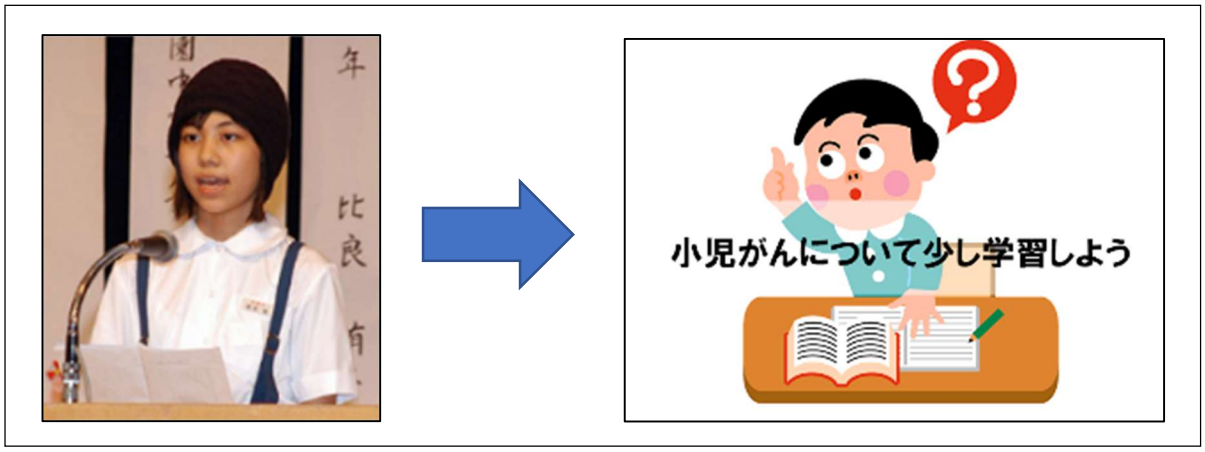


図７　保健の授業で道徳と関連付けるための流れ

道徳の授業の中では小児がんについてはあまり触れなかったため、次時の保健の授業で小児がんについて説明し、小児がんと一般的な大人のがんを区別した。

イ　回想スライド

図８は、保健の授業の２時間目の後半に提示した「回想スライド」である。道徳を含めたこれまでの学習を振り返るために、各時間を想起させるスライドを示した。改めて振り返ることで、道徳の時間に自分が考えたことや、保健の時間で学習した内容を想起させ、メッセージ（p. 22参照）に反映できるようにと考えた。

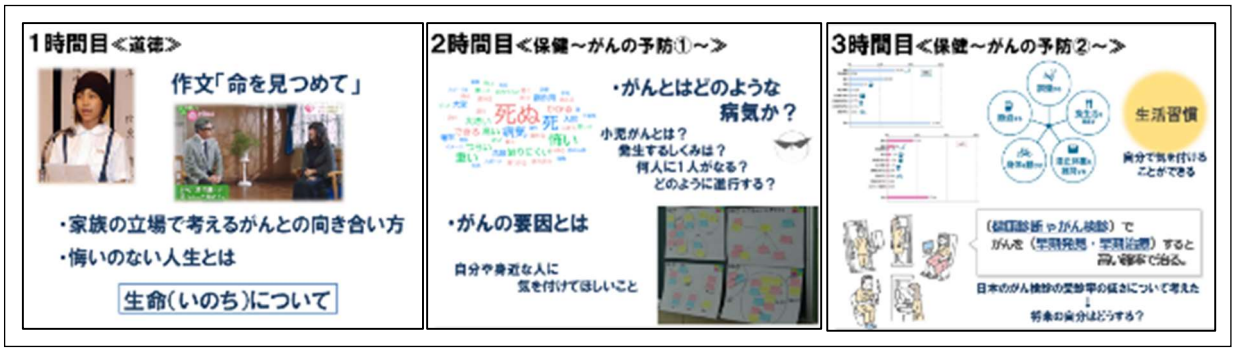


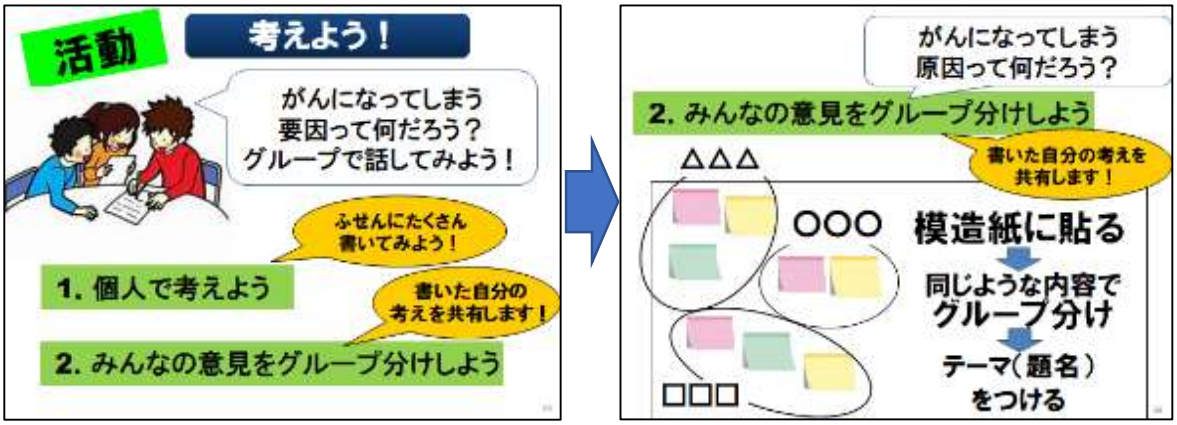
図８　回想スライド

（４）がんを自分事として考え、認識を深めることに結び付けるための学習の工夫

ア　「がんの要因」を考えるブレーンストーミングを活用したグループワーク

図９、10は、保健の授業の１時間目の後半に、「がんになってしまう要因って何だろう？」について、３人組でグループワークを行い、「自分事」とするために、身近な人の健康課題をイメージしたり、将来の自分に当てはめたりしながら活動した。

また、グループワークの際、個人で考えたアイディアを共有した。さらに、新型コロナウイルス感染症対策の観点から、個人で使用した付箋がわかるように色を指定し、自分の付箋は自分で動かすなど配慮した。



課題と流れの提示　　グルーピングの流れの確認

図９　グループワークの説明スライド

図10　個人で考え、グループワークから全体共有までの流れ

イ　振り返りシート

本研究では、それぞれの授業をどうとらえたか、振り返りシートを活用し、記入することとした。図11は、「自分事」とするために、「身近な人に、今日の授業のことを話そうと思いますか？」という質問項目を設定し、より身近な人とのつながりを意識させる工夫を行った。

４、身近な人に、今日の授業のことを話そうと思いますか？

（４：そう思う　３：どちらかというとそう思う　　２：どちらかというとそう思わない　１：思わない）

○　４・３を回答した人にうかがいます。
誰にどのような内容を伝えたいですか？

誰に？
伝えたい内容

○　２・１を回答した人にうかがいます。
そう思った理由を教えてください。

図11　振り返りシート「４、身近な人に、今日の授業のことを話そうと思いますか？」

ウ　効果的なデータ資料の活用

「自分事」として考えるために、自分に関連させ、イメージしやすい資料を活用することとした。

（ア）がんの要因についてグラフ化した資料

がんのリスクを下げる又は上げない行動について気付かせるために、「がんのリスク・予防要因」（国立がん研究センター　がん情報サービス）のグラフを活用した（資料編p. 27参照）。

（イ）地域のがん検診にかかる費用の提示

図12は、文部科学省「がん教育推進のための教材」中学校・高等学校版のスライド「がん検診の種類」に、茅ヶ崎市のがん検診にかかる費用を追加したスライドである。地域のがんの情報を提示することで身近なこととしてとらえてもらうために本スライドを作成した。

図12　がん検診の種類と金額（茅ヶ崎市、令和２年８月現在）

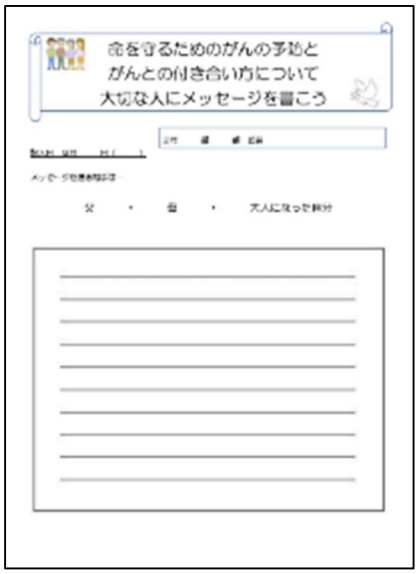
（５）がんを自分事として考え、認識を深めるためのメッセージ活動

本研究では、がんを自分事として考え、認識を深めるために、「命を守るためのがんの予防とがんとの付き合い方について大切な人にメッセージを書こう」というテーマで、ワークシート（図13）にメッセージを作成する活動を行った。

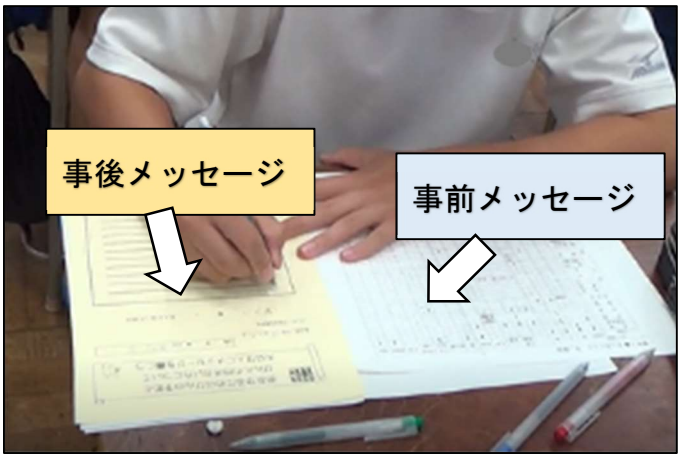
生涯のうちにがんにかかる可能性は、２人に１人とされている今日において、自分だけでなく最も身近で大切な人である家族もがんに罹患する可能性があることを踏まえ、メッセージの対象を「大人になった自分」「父」「母」とすることで、生徒ががんをより身近な健康課題としてとらえ、自分事と感じる効果があると考えた。

実施のタイミングは、がんの予防等について知識が乏しい事前アンケート時と、保健の授業の２時間目（授業最後）の２回に設定した。

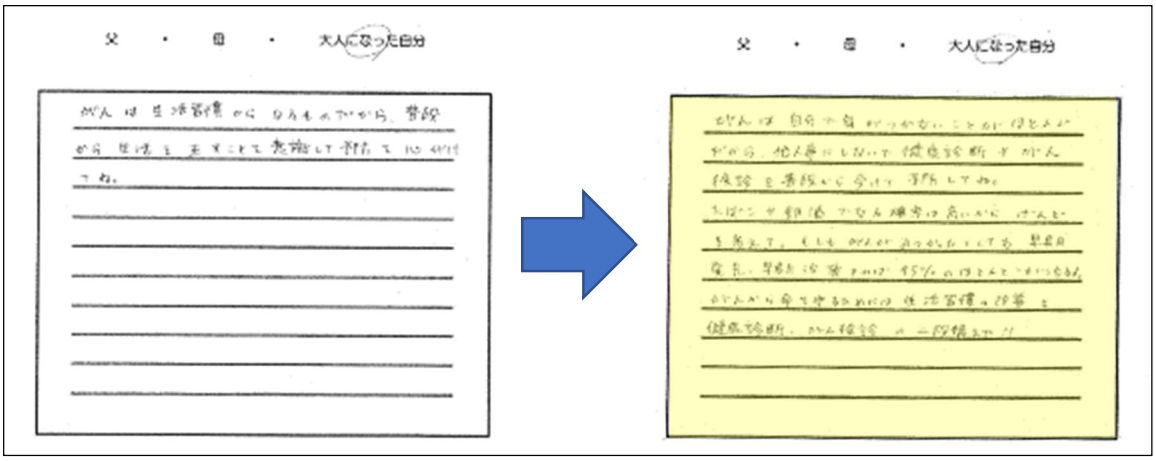
３時間で学んだ「がんの予防」と「がんとの付き合い方」をテーマとし、メッセージとして表現させることで、生徒が学習内容について認識を深めるとともに、その認識の変容を感じ取ることができると考えた。また、授業最後に書くメッセージは、授業前の内容を、加筆・修正する活動とし、事前・事後の変容を可視化し、認識の深まりを感じることができるようにした。



メッセージ活動のワークシート



メッセージ活動の様子



大切な人へのメッセージの記載例（左：事前　右：事後）

図13　メッセージ活動

（６）新型コロナウイルス感染症拡大防止対策について

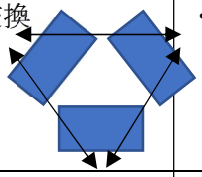
茅ヶ崎市教育委員会発行「新型コロナウイルス感染症対策と学校運営に関するガイドライン～学校における新しい生活様式の定着に向けて～（令和２年７月）」（茅ヶ崎市教育委員会　2020）には、「学習活動を行う際の留意点、工夫」として、次の表３の記載がある。

表３　「学習活動を行う際の留意点、工夫」

	活動場面	特に講じるべき対策	留意点や工夫の例
①	ペアワーク・ グループワーク	（イ）マスクの着用 （エ）３密の状態が同時に重ならないようにする	・対面の活動にならざるを得ない場合は、必要最小限の時間で済ませられるよう、明確な指示を出す。 ・近距離・密接での活動にならないように留意する。 ・マスクをしていても必要最低限の声の大きさで話すこと、関係のない話はしない（目的が何かを理解する）ことを児童・生徒に指導する。
②	教具の共有	（ウ）手洗い （エ）３密の状態が同時に重ならないようにする	・原則、避けることが望ましいが、難しい場合は、共有人数を制限する（グループごとなど）。 ・個人の文房具や教科書等の貸し借りが起こらないよう、忘れ物等への対応の準備をしておく。 ・授業前後の手洗いを徹底する。
③	発表	（イ）マスクの着用 （エ）３密の状態が同時に重ならないようにする	・発表する位置を決め、前方２メートルには児童・生徒がいないようにする。 ・黒板、ホワイトボード、ＩＣＴ機器等を活用し、図や表などを使いながら、シンプルに分かりやすく説明できるような指導につなげる。（話をする量を減らす工夫） ・大きい声で発表させるのではなく、友だちの発表をしっかりと聞くことの指導を徹底する。 ・声が聞き取りにくい場合には、マイクを活用する。
④	意見や感想の 交流・共有	（イ）マスクの着用 （エ）３密の状態が同時に重ならないようにする	・あらかじめ児童・生徒の考えを集約し、プリントにして配付する。 ・黒板やホワイトボード、教室の掲示コーナー等、数か所に掲示し、密にならないように、順番に見て回らせる。

本研究の授業では、表３をふまえ、次に示す新型コロナウイルス感染症対策（表４）を講じた。

表４　「本研究で講じた新型コロナウイルス感染症対策」

活動	方法	感染症対策
・３人組で意見交換 	・机が接しない位の距離で向かい合わせる。 （１m以上の間隔をあけ、15分以内の活動とする）	・マスクの着用 ・授業後、手洗いの徹底
・３人組でグループワーク ・付箋を使ってブレーンストーミング→グルーピング→共有	使用するもの ・付箋　・ホワイトボード ・マーカー ・ブレーンストーミング用Ａ２の用紙	・マスクの着用 ・授業後、手洗い徹底 ・グループ毎に使用したホワイトボード、マーカーの消毒
・ペア学習（前後左右）	・机と机の間隔を保った状態で意見交換	・マスクの着用
・発表	・代表の生徒が、クラス全員に向けて発表する場所は、自分の座席又は教卓付近	・マスクの着用 ・発表の際に、前方２メートル以内に生徒がいないように場所を設定する。
・意見や感想の交流・共有	・班ごとに同じタイミングで生徒が移動する	・マスクの着用 ・密にならないように生徒が順番に回る

４　授業の実際

【本時の展開】（１／３時間目、特別の教科道徳）

（１）内容項目　生命の尊さ

（２）主題名　　生命について考えよう

（３）ねらい　　生命の尊さについて、その連続性や有限性なども含めて理解し、かけがえのない生命を尊重すること。

（４）教材名　　「命を見つめて」作文
「いのちと向き合うがんを学ぼう②がんを通して〈命〉を考える」ＤＶＤ資料

（５）展開

	学習内容と学習活動	指導上の留意点
導入 ５ 分	１　本時のねらいを把握する。 ○「生命（いのち）って聞いて、どんなことをイメージしますか？」	・自分の思いを想起させることで、本時の課題を自分事として考えやすいようにする。 ・がんについての内容に触れることを説明し、つらくなったら遠慮なく申し出るなど配慮する。
展開 40 分	２　猿渡瞳さんを紹介し、動画を視聴する。 （1）動画の内容について考える。（全体） ○「動画を視聴して一番心に残ったことは何かな？」 【ワークシート記入】 （2）瞳さんの気持ちを自分に置き換えて考える。 （個人→全体） ○「瞳さんは、がんと宣告を受けたとき『とてもショックでした』と書いてありますが、もし自分が『がん』と宣告されたら、どのような気持ちになりますか？」 【ワークシート記入】 ３　家族の心情を考えよう。（個人→全体） ○「あなたが瞳さんの家族だったら、がんの宣告を受けてどのように考え、どのように行動したいですか？」 【ワークシート記入】 ○「瞳さんのお母さんはどう思っていただろう」（お母さんのインタビュー視聴） ○「家族以外で支えてくれる人は誰だろう」 （お母さんのインタビュー視聴） ４　メッセージに込められた思いを考えよう。 （個人→全体） ○「瞳さんは『<u>悔いのない人生</u>』を送ったと思いますか？」【ワークシート記入】 ○「自分にとって『<u>悔いのない人生</u>』とはどんな人生？」【ワークシート記入】	・本人が作文を読んでいる動画を視聴し、主人公の気持ちについて考えさせる。 ・作文の内容だけでなく、作文を読んでいる時の印象やその様子などにも触れるように助言する。 ・数名に発表させる。 ・数名に発表させる。 ・他者の視点（自分が瞳さんの「父・母・兄・姉・弟・妹」だったとして、どのように受け止め、行動をとろうとするか）で考えさせる。 ・家族ががんになった時の苦労や心情を感じさる。 ・学校の友達や先生など、家族以外の人の支えがあることについて触れさせる。 ・発問につなげるために、瞳さんが亡くなったことを伝える。 ・個人で考え、自分の出席番号カードを黒板に貼る。 悔いが残った ― 悔いは残ってない ・瞳さんや家族の気持ちになって考えたことを受け、自分にとって悔いのない人生とは何かを考えられるよう促す。
まとめ ５ 分	５　本時のまとめをする。（個人） ○今日の授業を通して、「生命」についてどのように考えましたか？【ワークシート記入】	・導入の発問を再度投げかけ、生命はかけがえのないものであることを知り、自他の生命を尊重しようとする気持ちを高める。

［授業者としての振り返り］

発問が多いように感じた。最後の振り返りの時間をもう少し確保できると、本時の内容がより深まるのではないかと感じた。

動画の視聴は、教師が説明するよりインパクトがあり、生徒も興味をもって授業に取り組む姿勢が見られた。

［研究の視点からの振り返り］

中学生のがん患者から、生き方や周囲の人との関わり方を考えさせることで、自分ががんになった時だけでなく、身近な人ががんになった時の気持ちや行動について考えることができた。

【本時の展開】（２／３時間目、保健体育《保健分野》）

（１）本時の目標

＜知識及び技能③＞

・がんは、異常な細胞であるがん細胞が増殖する疾病であり、その要因には不適切な生活習慣をはじめ様々なものがあることについて、理解できるようにする。

＜思考・判断・表現①＞

・生活習慣病の予防における　事柄や情報などについて、原則や概念を基に整理したり、個人生活と関連付けたりし て、自他の課題を発見するとともに、習得した知識を活用し、生活習慣病を予防するための方法を選択している。

（２）本時の評価規準と評価方法

＜知識・技能③＞＜思考・判断・表現①＞【観察・ワークシート】

（３）展開

	学習内容と学習活動	教師の指導支援　（◆評価規準と方法）
導入 ５ 分	１、本時の学習課題について考える。 ・前時（道徳）の授業の振り返り。 ・クラスの「がんのイメージ」を提示する。	・がんを取り扱う際の配慮事項伝える。 ・事前アンケート「がんのイメージ」の結果を提示することで、視覚的に印象づけ、本時の課題把握につなげる。
展開 40 分	◎ がんがどのような病気か理解する！　◎ がんの発生要因を考えよう！ ２、がんがどのような病気か理解する。 がんってどんな病気だろう？ （１）小児がん（骨肉腫）について （２）日本のがんの現状について ・がんになる人は何人？ ・がんで亡くなる人は何人？ （３）がんができるしくみについて ・がんとはどのような細胞か？ ・がんが発生する場所は？ ・がんはどのように進行するだろう？ ・がんの自覚症状とは？ ３、がんの要因について考えよう。 がんになってしまう要因って何だろう？ （１）がんになってしまう要因について考え、グループで話し合う。 ブレーンストーミングの活動を通して、知っていることや予想などを付箋に書き出し、グループ内でお互いに意見を出し合う。 ・各自の意見を付箋に書く。 ・出し合った意見を模造紙に貼り、グルーピングする。 ・黒板に貼り、全体で共有する。 （２）がんを予防するために、自分や身近な人が気を付けることについて考える。 ・自分の考えをワークシートに記入する。 ・グループで発表する。	・スライド資料、動画を活用し、がんについて学習する。 ・ワークシートの内容に沿って知識を習得する。 ・前時（道徳）で扱った主人公が患っていた小児がん（骨肉腫）について、動画を視聴し、説明する。 ・一般的ながんと区別するよう伝える。 ・現状から、他人事ではないことを伝えていく。 ・日本人のがん罹患数第一位の大腸がんを例にし、自覚症状について説明する。 ・生活習慣に関わるものをはじめ、多くの要因があることに気付くように促す。 ・事実でない意見に関しては助言する。 ●コロナウイルス対策として、合計で15分以上の密になる活動は控える。 ●話し合いの際は、付箋の色で個人を特定したり、教具の共有に気を付ける。 ・各グループの発表を、個人の生活と関連付けながら整理する。 ・間違っていてもかまわないので、共有した情報も参考にするよう助言する。
まとめ ５ 分	４、本時のまとめをする。 ・自己評価、振り返り【ワークシート記入】	・本時の学習内容の振り返りをする。 ・ワークシートを回収し、補足や指導の必要な生徒には個別に指導する。 ◆知識・技能③【観察・ワークシート】 思考・判断・表現①【観察・ワークシート】

［授業者としての振り返り］

知識として習得させたい情報が多くなってしまい、一方的な講義形式の時間が多くなってしまったが、視聴覚教材を効率よく授業の中で取り入れ、生徒が飽きない工夫をすることができた。また、後半のグループワークでは、自分の身近な人の生活習慣を想起させることで、考えをたくさん出す生徒も多かった。

［研究の視点からの振り返り］

がんの要因を考え、グループワークで付箋に記入する場面や出した意見をグルーピングする場面等は自分事として考えることに結び付けるための活動であったと考えられる。

【本時の展開】（３／３時間目、保健体育《保健分野》）

（１）本時の目標

＜知識及び技能④＞

・がんの予防には、生活習慣病の予防と同様に、適切な生活習慣を身に付けることなどが有効であることについて、理解できるようにする。

＜思考力・判断力・表現力等②＞

・生活習慣病などの予防について、疾病等にかかるリスクを軽減し健康を保持増進する方法を考え、選択した理由などを、他者と話し合ったり、ノートなどに記述したりして、筋道を立てて伝え合ったりできるようにする。

（２）本時の評価規準と評価方法

＜知識・技能④＞＜思考・判断・表現②＞【観察・ワークシート】

（３）展開

	学習内容と学習活動	教師の指導支援　（◆評価規準と方法）
導入 5 分	１、本時の学習課題について考える。 ○前時の学習内容を振り返る。 ・がんがどのような病気かについて ・がんの要因について	・前時の資料を見ながら復習する。 ・ワークシート、付箋模造紙準備（コピーを配付）
展開 40 分	◎がんを予防するためにできることを考えよう。　◎がんとの付き合い方について考えよう。 ２、がんを予防するためにできることを考えよう。 （１）日本人におけるがんの要因について ・日本人のがんの要因の資料確認 ・５つの健康習慣 （２）前時に個人と班で考えたものが当てはまっているか確認しよう。 ・前時に使用した付箋を貼った模造紙を確認し、５つの健康習慣を確認する。 ３、がんとの付き合い方について考えよう。 がんから命を守るためには生活習慣だけ見直せばいいのか？ （１）早期発見について ・保険会社のＣＭを視聴する。 （２）日本のがん検診受診率について なぜ日本のがん検診の「受診率」は低いの？ ・個人で考え、前時の３人組で話し合う。 ・ホワイトボードにまとめ、発表する。 （３）ここまでの学習内容のまとめ がんから命を守るには生活習慣の改善と健康診断・がん検診の二段構え。 ４、３時間の授業を振り返る。 ・３時間のまとめスライド（回想スライド）を流し、授業を振り返る。 ５、がんの予防に向けたメッセージを書こう。 命を守るためのがんの予防とがんとの付き合い方について大切な人にメッセージを書こう。	・要因にある「感染」について補足する。 ・前時のワークシートと付箋を貼った模造紙のコピーを、５つの健康習慣やデータと照らし合わせ、生活習慣が多くの要因を占めていることを伝える。 ・ＣＭに登場するプロ野球選手の状況を説明し、早期発見・検診の大切さについて触れる。 ・検診を受けようとしない人の心理にも着目させ、自分の将来の検診に行く姿勢を育ませる。 ・なぜ、検診を受けない日本人が多いのか考えさせ、もし自分が、検診を受ける年齢になった時にどのように考えるかをイメージさせる。 ・授業者ががんを自分事として考えた体験談を話し、メッセージ活動につなげる。 ・事前アンケート時に書いたメッセージを返却し、再度考えさせる、 ・３時間のがんについての学習がいかせるように助言し、記入させる。
まとめ 5 分	６、本時のまとめをする。 ・自己評価、振り返り【ワークシート記入】	・がんを予防するための生活習慣やがんとの向き合い方について授業者の思いを伝える。 ◆知識・技能④【観察・ワークシート】 思考・判断・表現②【観察・ワークシート】

［授業者としての振り返り］

スライドで３時間の学習内容やキーワードを提示し、これまで学習した内容を想起させ、最後のメッセージ活動につながったと思われる。

［研究の視点からの振り返り］

「茅ヶ崎市のがん検診の受診料」の説明の場面では、生徒は身近な問題としてとらえることができたようであり、メッセージを書く場面では、より「自分事」として考えることができたと思われる。

５　検証授業の結果と考察

検証授業から得られたデータを基に、設定した検証の視点（pp. 10－11参照）に沿って仮説を検証していくこととする。

検証授業の出席者数については、表５に示したとおりである。

事前・事後アンケートの回収状況については、表６に示したとおりである。

表５　検証授業の出席者数

	１時間目（道徳）	２時間目（保健）	３時間目（保健）
２年１組（28名）	26名	25名	26名
２年２組（28名）	27名	27名	25名
２年３組（29名）	28名	28名	28名
合計	**81名**	**80名**	**79名**

表６　事前・事後アンケートの回収状況

	事前アンケート回収数	事後アンケート回収数
２年１組（28名）	26名	26名
２年２組（28名）	27名	27名
２年３組（29名）	28名	28名
合計	**81名**	**81名**

本研究の対象クラスの１組、２組、３組について、複数項目のデータを比較したところ、質問項目によって差が見られたが、３クラスとも同じ内容の授業を行ったため、３クラスを１つの集団としたデータ表記で記載することとした。

本研究においては、「そう思う」、「どちらかというとそう思う」、「どちらかというとそう思わない」、「そう思わない」の４件法によるアンケート結果において、「そう思う」、「どちらかというとそう思う」を合わせて「そう思う群」、「どちらかというとそう思わない」、「そう思わない」を合わせて「そう思わない群」として、グラフには数値を太枠で囲んで示した。

また、本研究において、４件法と表記する場合の選択肢は、一部の質問を除き、上記選択肢を意味することとする。そして、割合（100％）を表記したグラフに関しては、小数点第１位を四捨五入しているため、合計が100％にならない場合がある。

なお、文中の生徒の記述については、誤字・脱字を除き、生徒が記述したままの表現で記載し、太字、下線は筆者が加筆した。

（１）生徒は道徳の授業をどのようにとらえたか

図14、15は、事前・事後アンケートの「『道徳の授業』に興味・関心をもって取り組めた」と「『道徳の授業』は自分にとって役に立つものだ」という質問（４件法）に対する回答割合である。

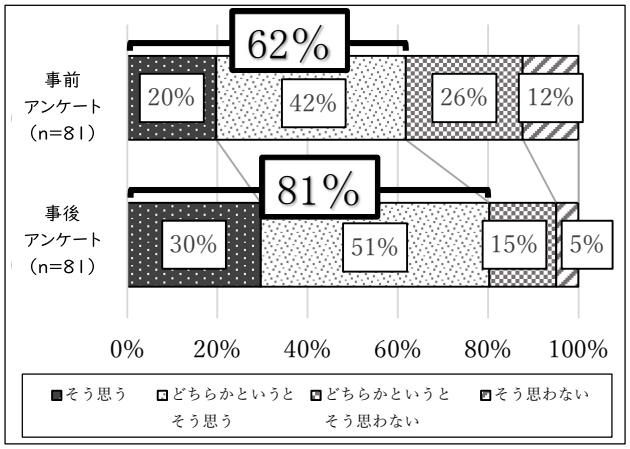


図14　「『道徳の授業』に興味・関心をもって取り組めた」に対する回答割合の事前・事後の比較

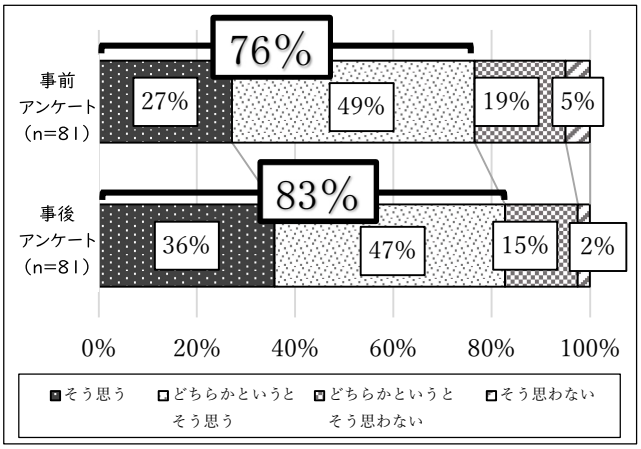


図15　「『道徳の授業』は自分にとって役に立つものだ」に対する回答割合の事前・事後の比較

図14を見ると、「そう思う群」の割合は、事前の62%から事後では81%と19ポイント上昇し、概ねの生徒が肯定的な回答を示した。また、事後では「そう思う」「どちらかというとそう思う」と回答した生徒が、それぞれ約10ポイントずつ上昇する結果となった。さらに、図15を見ると、「そう思う群」の割合は、事前の76%から事後では83%と７ポイント上昇した。

今回の授業は、「生命の尊さ」という重いテーマであったが、同年代のがん患者を教材としたことで、心情に働きかけられ、概ねの生徒が道徳の授業に対する興味・関心が高まり、道徳は自分にとって役に立つものであると認識した生徒が増えたと考えられる。

図16、17は、事後アンケートの「生命の大切さについて深く考えることができた」と道徳ワークシート（振り返り）の「自分の考えを深めることができた」という質問（４件法）に対する回答割合である。

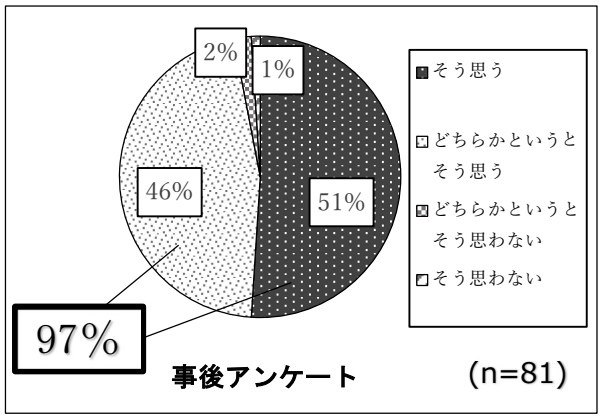


図16　「生命の大切さについて深く考えることができた」に対する回答割合

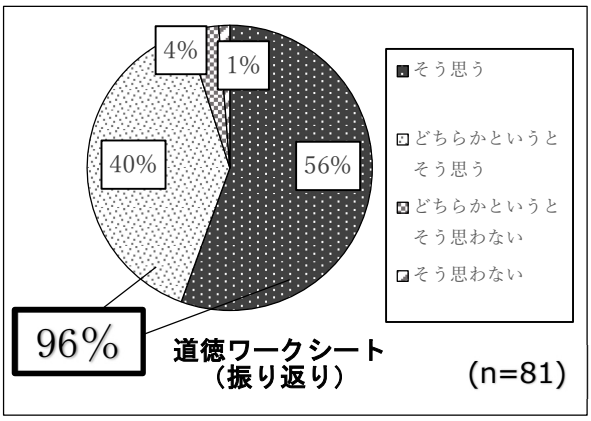


図17　「自分の考えを深めることができた」に対する回答割合

図16を見ると、「そう思う群」の割合は97％と、高い値となった。また、その中で「そう思う」と回答した生徒は51％と約半数であった。これは、自分たちと同年代のがん患者を教材として活用したことで、授業に対する興味・関心が高まるとともに、「自分がもしがんになってしまったら」、「がん患者（瞳さん）の家族だったら」と考える場面を設定したことで、自分事としてとらえ深く考えることができたと考えられる。

また、図17の道徳の授業後の「そう思う群」の回答割合についても96％と高い値を示し、ほとんどの生徒が自分の考えを深めることができたと考えられる。

図18は、事後アンケートの道徳の授業において「新たな気づきや発見があった」という質問（４件法）に対する回答割合である。

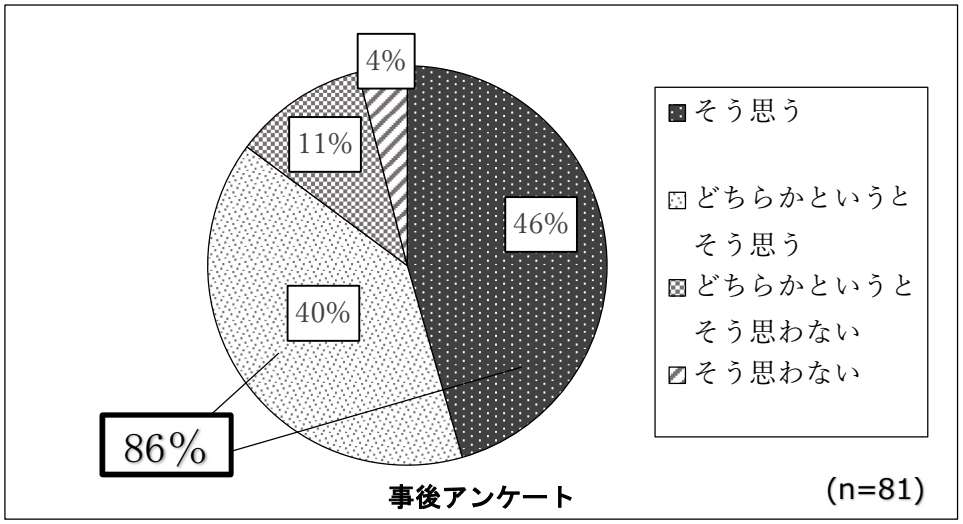


図18　「新たな気づきや発見があった」に対する回答割合

図18を見ると、「そう思う群」の割合は、86％と高い値となった。また、「そう思う」と回答した生徒は46％（37名）と約半数に上った。本研究における道徳の授業の教材が、概ねの生徒にとって新たな気付きや発見につながったと考えられる。

また、表７は、道徳ワークシート（振り返り）の「今日の授業を通して、生命《いのち》についてどのように考えましたか？」という質問の回答の自由記述を抜粋したものである。

表７　道徳の振り返り「今日の授業を通して、生命《いのち》についてどのように考えましたか？」の記述内容（抜粋）

生徒Ａ **生命は１番身近な物だけど、意外と気づかないこと、考えると分からないこと**だけど、瞳さんみたいにまだ長く生きていないのに、亡くなってしまうかもしれない恐怖を抱えながら、悔いの残らないようにしていて、とてもすごいと思った。自分も入院した時を思い返してみれば、**いろいろな人が支えてくれていた**ので、とても感謝している。
生徒Ｂ 生命があるからできること、生命があるからできないことそれぞれあると思うけど、生命は誰にでも大切。**生命は自分だけではなく、誰かのためになると気づきました。**

生徒Ｃ 　毎日、普通に生きているけど、**生きたくても生きられない人がいることを考えて生きる必要があると思いました。**
生徒Ｄ 　生命は、人間にとってなくてはならないもので、今日**猿渡瞳さんの「命を見つめて」という弁論を聞いて、改めて命という重さを感じられました。**
生徒Ｅ 　**瞳さんのお母さんの動画が印象的だった。**大切な命なので、いろいろな人に迷惑をかけず、一生懸命悔いのないように生きていこうと思った。

表７の生徒Ａは、自己の経験から、改めて生命のありがたさを感じる記述が見られた。

生徒Ｂ・Ｃは、いずれも自分だけでなく、他者の存在を認識した記述（下線部）が見られた。また、生徒Ｄ・Ｅは、授業で活用した同年代のがん患者の教材に触れたことから、生命について考えることができた記述が見られた。これらは、がん教育の目標に示されている「がんについて学ぶことや、がんと向き合う人々と触れ合うことを通じて、自他の健康と命の大切さに気付き、自己の在り方や生き方を考え」（文部科学省　2015　p. ２）に該当する記述と考えられる。

さらに、これらの記述は、道徳において、同年代のがん患者の教材を扱ったことや、母親のインタビュー動画を視聴し、さらに「悔いのない人生」について考える活動を通したことが影響したと考えられる。

本校のこれまでの道徳の授業では、読み物教材を主とした授業を行ってきた。今回の道徳の授業は、同年代のがん患者を題材とした教材を活用することに加え、スライド資料や動画の視聴等の教材を工夫したことで、生徒の道徳の授業に対する興味・関心が高まり、生命の尊さについてより深い学びにつながったものと考えられる。

検証の視点「（１）生徒は道徳の授業をどのようにとらえたか」のまとめ

・概ねの生徒が、道徳の授業では、同年代のがん患者の教材を活用することで、授業に対する興味・関心がこれまでの授業に比べて高まり、生命の大切さについて深く考えることができた。

（２）生徒は保健の授業をどのようにとらえたか

ア　保健の授業をどのようにとらえたか

図19、20は、事前・事後アンケートの「『保健の授業』に興味・関心をもって取り組めた」と「『保健の授業』は、自分にとって役に立つものだ」という質問（４件法）に対する回答割合である。

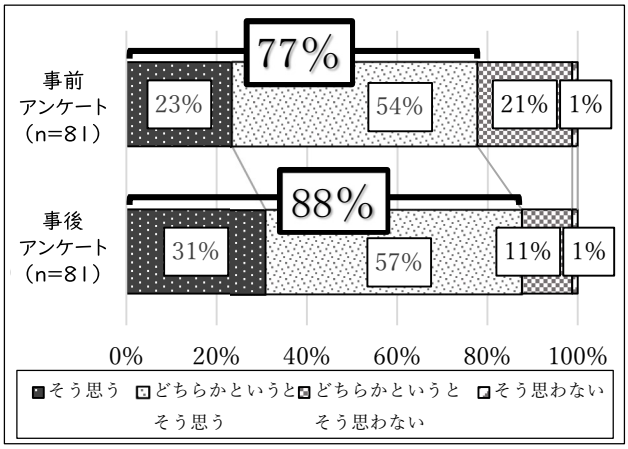


図19　「『保健の授業』に興味・関心をもって取り組めた」に対する回答割合の事前・事後の比較

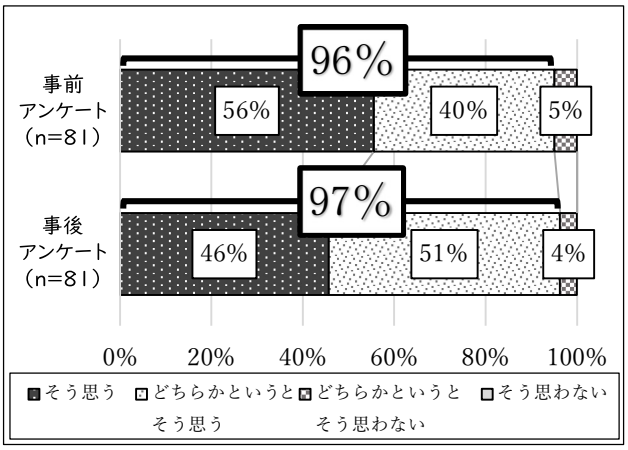


図20　「『保健の授業』は、自分にとって役に立つものだ」に対する回答割合の事前・事後の比較

図19を見ると、「そう思う群」の割合は、事前が77％と、道徳の授業に比べると高い値を示した。事後では88％と11ポイント上昇しており、概ねの生徒が、これまでの授業以上に今回の保健の授業に興味・関心をもって取り組むことができたと考えられる。

また、保健の授業の振り返りの記述には、今回活用した視聴覚教材（資料）について、保健の授業への興味・関心に結び付いたと思われる記述があった。「わかりやすい動画とかがあって、がんがどのように大きくなるかしっかり分かった」や「大腸がんの写真を見たら、とてもびっくりしたし、こんなものが体の中にあると思うととても怖いと思った」といった記述が見られた。今回の検証では、生徒に視聴覚教材等に関する質問項目を設けていなかったが、生徒の振り返りの記述からは、活用した視聴覚教材は、保健の授業への興味・関心の高まりにつながる教材であったと推察される。

次に、図20を見ると、「そう思う群」の割合は、事前で96％、事後でも97％と高い値を示しており、ほとんどの生徒が、保健の授業は自分にとって役に立つものであると考えていることがわかった。

しかし、「そう思う」と回答した生徒に着目してみると、事前と比べて事後では10ポイント下がる結果となり、様々な記述等を分析してみたが、明確な理由はわからなかった。

図21は、事前・事後アンケートの「『保健の授業』は、健康な生活を送るために重要だ」という質問（４件法）に対する回答割合である。

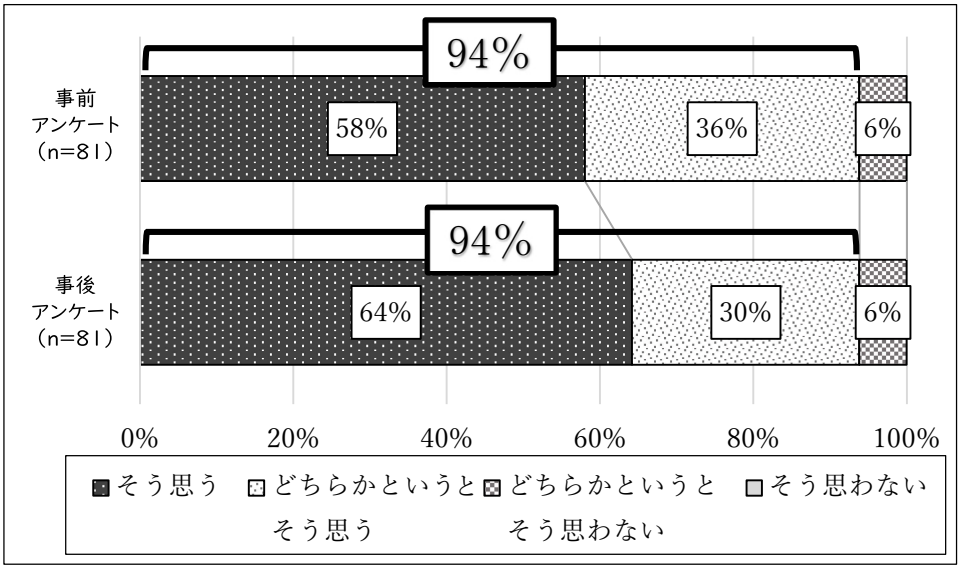


図21　「『保健の授業』は、健康な生活を送るために重要だ」に対する回答割合の事前・事後の比較

図21を見ると、「そう思う群」の割合は、事前・事後とも94％と変わらなかった。しかし、「そう思う」と回答した生徒は、事前では58％だったが、事後では64％と６ポイント上昇した。生徒は保健の授業で取り上げた「生活習慣の改善」の内容が、がんの予防につながり、健康な生活を送るためには重要なことであると理解することができたからだと考えられる。

図22、23は、事後アンケートの「『保健の授業』について深く考えることができた」と「新たな気づきや発見があった」という質問（４件法）に対する回答割合である。

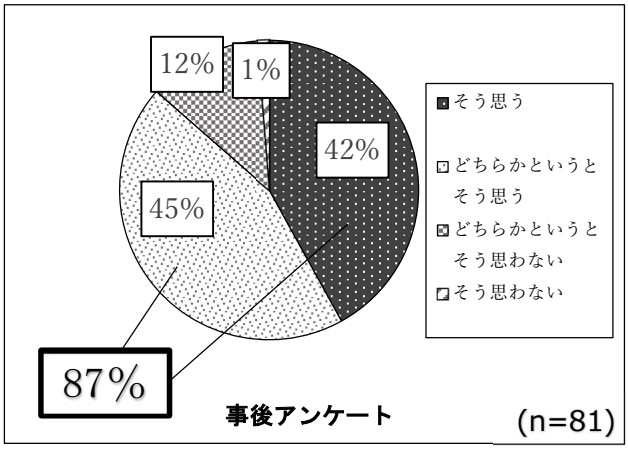


図22　「『保健の授業』について深く考えることができた」に対する回答割合

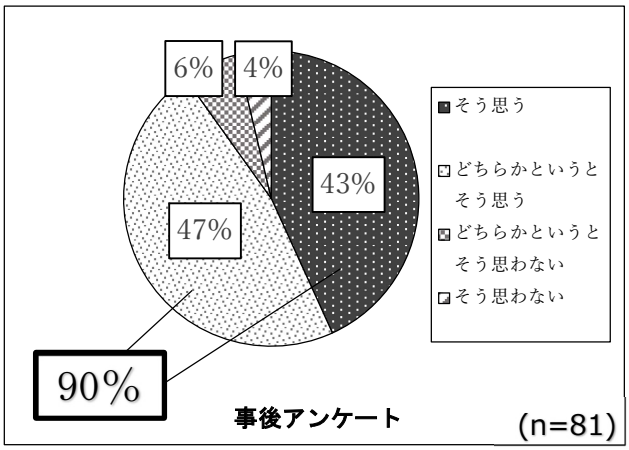


図23　「新たな気づきや発見があった」に対する回答割合

図22を見ると、「そう思う群」の割合は87％と高い値を示し、概ねの生徒が今回の保健の授業について深く考えることができたと回答している。

保健の授業後の振り返りでは、「今日の授業を通して、学んだことや新しい発見、感想等を

自由に書いてください」の質問では、保健の１時間目では「もっと知識を増やしてがんにならないよう、予防・対策を心がけていきたいと思った」、保健の２時間目では「がんになる可能性は低くない！と頭に入れて将来ちゃんと健康診断やがん検診をしようと思います」という記述がみられ、興味関心が高まり、保健の授業について深く学ぶことができたと考えられる。

また、図23を見ると、「そう思う群」の割合は90％と高い値を示し、多くの生徒が、今回の保健の授業について新たな発見や気付きがあったことがわかる。

保健の授業後の振り返りの記述の内容に、「がんになりにくい体づくりをしていくかが大切になっていく」や「がんになってもあきらめない心が大事だと学んだ」などの記述が見られた。生徒は、がんの予防や検診について知識を深め、改めて今回学習したことが重要であると感じることができたと考えられる。

図24は、事後アンケートの「今回の授業に関連することで、『もっと知りたい』と思った部分（内容）があった」という質問（４件法）に対する回答割合である。

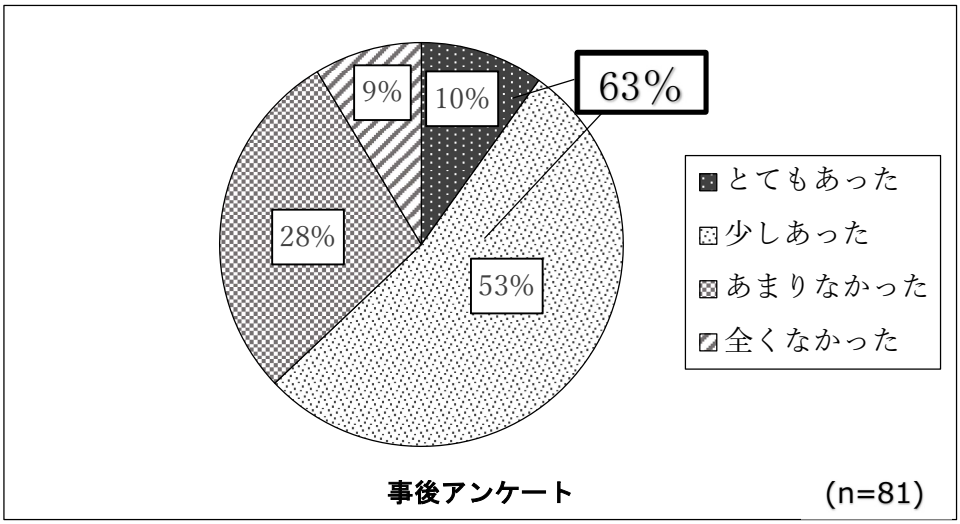


図24　「今回の授業に関連することで、『もっと知りたい』と思った部分（内容）があった」に対する回答割合

図24を見ると、「そう思う群」の割合は63％であった。また、上記の質問に対して「選んだ理由を書いてください」という自由記述の回答を表８のように分類した。

表８　「今回の授業に関連することで、『もっと知りたい』と思った部分（内容）があった」に対する自由記述の回答の分類（重複回答あり）

自由記述の内容	4 あった	3 少しあった	2 あまりなかった	1 全くなかった
○予防方法について	３件	６件	１件	0
○がんの種類について	１件	９件	0	0
○がんの特徴（症状）について	0	14件	0	0
○治療方法・抗がん剤について	２件	８件	0	0
○小児がんについて	１件	４件	0	0
○がんになってしまった人の気持ちについて	１件	２件	0	0
○その他	２件	５件	２件	0
合計	10件	48件	３件	０件

表８を見ると、「あった」「少しあった」に回答した生徒のうち、「がんの特徴について（14件）」「がんの種類について（10件）」「治療法・抗がん剤について（10件）」「予防方法について（９件）」が多かった。

特に、「治療法・抗がん剤について」は、今回の授業では触れなかった内容であり、半数以上の生徒は、がんの内容についてさらに知りたいと思っていることがわかった。

イ　道徳の後の保健の授業が有効に機能したか

図25は、事後アンケートの「がんについての学習を、道徳と保健の授業を関連させて行いました。３時間の授業を終えてみて、道徳で学んだことを、保健の学習に生かすことができましたか？」という質問（４件法）に対する回答割合である。

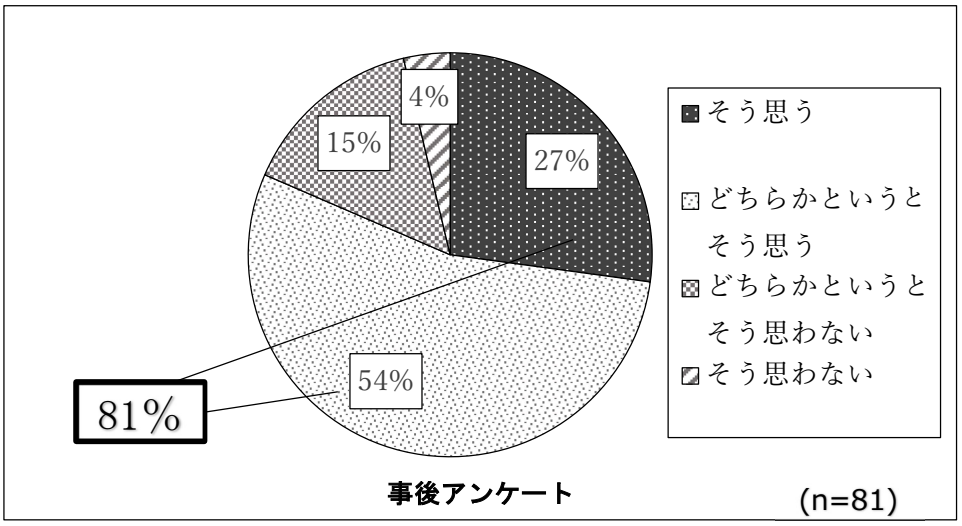


図25　「がんについての学習を、道徳と保健の授業を関連させて行いました。３時間の授業を終えてみて、道徳で学んだことを、保健の学習に生かすことができましたか？」に対する回答割合

図25を見ると、「そう思う群」の割合は81％であった。概ねの生徒が道徳で学んだことを保健でいかすことができたと回答している。

表９は、図25の質問に対して、「選んだ理由を書いてください」の自由記述の回答である。81％の「そう思う群」に回答した生徒の記述のうち、「道徳で学んだことが保健に生かされた」と記述した内容を抜粋した。

表９　「そう思う群」の回答したうちの、「道徳で学んだことが保健に生かされた」に対して記述した内容（抜粋）

・保健の授業が分かりやすくなったり**考え方が変わって、前の学習に対する考えが変わった。** ・猿渡さんの動画を見て、**保健を深く考えられた。** ・がんのことを少しでも知ることで、保健の授業で**違う考え方をすることが可能**だから。 ・道徳では小児がんにかかった人のことを知り、改めてがんは怖いと思ったから、**その気持ちを持ちながら保健の学習ができた。** ・道徳で女の子が骨肉腫になった物語で、**その後の保健の授業もその人のことを関連させて考えられたから。**

・道徳の授業で命のことをやってその人はがんで亡くなったから、そういう所が**保健の授業に生かせると思う。**

表９を見ると、道徳の授業を受けることで「考え方が変わった」、「道徳で学んだことを保健の授業で生かせた」、「関連付けて学ぶことができた」といった記述が多く見られた。

また、表10は、上記の質問に対しての「そう思わない群」の生徒の記述内容を抜粋したものである。

表10　「そう思わない群」の記述した内容（抜粋）

・保健の時に**道徳のことも考えられなかった。**
・道徳が保健に**つながるとは思えない。**
・そんなに**関連性はなかった。**
・骨肉腫は原因不明で、**生活習慣は全然関係ない**となると、予防のしようがないから。

「そう思わない群」と回答した19％の生徒の記述には、「そんなに関連性はなかった」や「道徳が保健につながるとは思えない」という内容も見られ、今回の道徳の授業が直接「がんの予防」に結び付かなかった生徒もいた。

これらのことから、概ねの生徒は、道徳の授業「生命の尊さ」と保健の授業「がんの予防」との結び付きを感じることができたが、一部の生徒は結び付きを感じることができなかった。

検証の視点「（２）生徒は保健の授業をどのようにとらえたか」のまとめ

・概ねの生徒が、保健の授業では、「がんの予防」を学習する視聴覚教材を活用することで、授業に対する興味・関心がこれまでの授業に比べて高まり、がんについて深く考えることができた。
・概ねの生徒においては、道徳と保健の内容が結び付き、道徳の授業「生命の尊さ」が保健の授業「がんの予防」に有効に機能したが、一部の生徒には、十分に機能しなかった。

（３）生徒はがんを自分事として考え、認識を深めることができたか

ア　がんを自分事として考えることができるための基となる知識が習得できたか

図26は、本研究において、がんを自分事とするためには、知識の定着が必要不可欠だと考え、事前と事後アンケート時に「理解度チェック」（表11）を行った。質問は、全部で８問とし、事前・事後ともに同じ質問項目で実施した。

質問項目については、表11に示すこととした。また、（１）～（４）の質問項目は、「がんの病気の特性を理解できたか」について、（５）～（８）の質問項目は、「がんの予防に必要な知識を理解できたか」について、それぞれ比較・検証することとした。

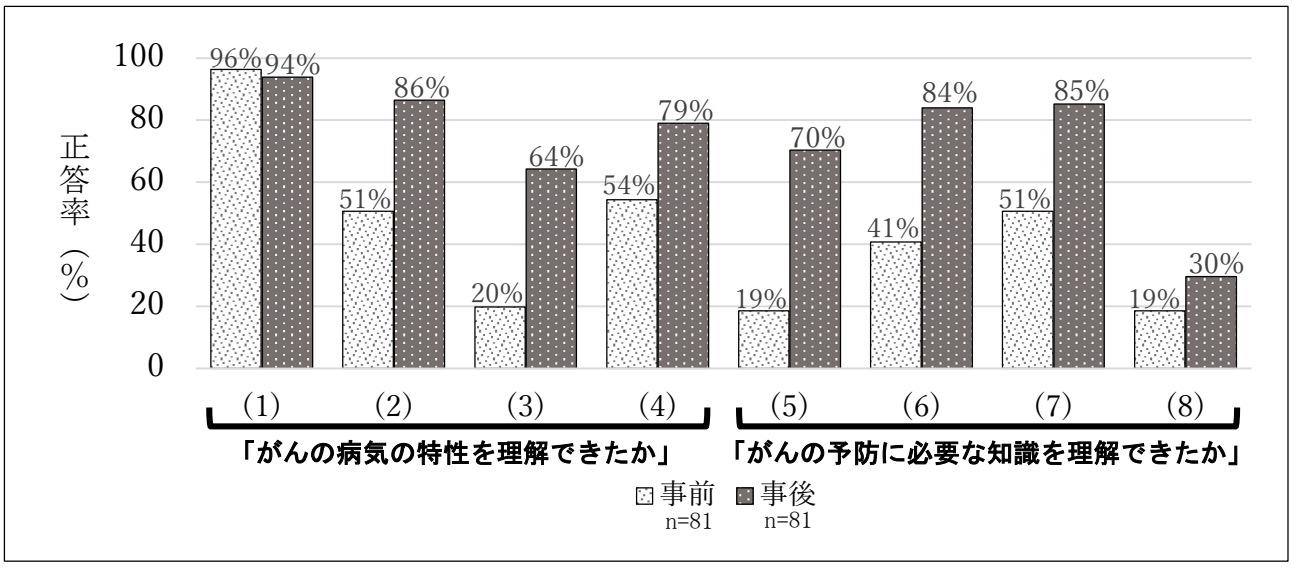


図26　「理解度チェック」事前・事後の正答率

表11　「理解度チェック」の質問項目

●「がんの病気の特性を理解できたか」 （1）がんは、日本の死因の第（　**1**　）位である。 （2）日本人の約（　**2**　）人に１人が、がんになる。 （3）日本では、がんで亡くなる人は、約（　**3**　）人に１人である。 （4）がんの主な発生原因は（　**生活習慣**　）である。 （※これを改善するだけで、がん発生の約６割は予防できるとされています。）
●「がんの予防に必要な知識を理解できたか」 （5）がんと診断されるがんの大きさは約（　**1**　）㎝からである。 （6）がんを早期発見・早期（　**治療**　）すると、約95%の人が治る。 （7）がんの早期発見のためには、（　**がん検診**　）が有効である。 （8）小児がんになる確率は、すべてのがんのうちの（　**1**　）%以下と、とてもまれな病気である。

（1）の質問の正答率は、事前と事後で２ポイント下がったものの、ほとんどの生徒が正しい回答をした。正答率がもともと高い理由としては、検証授業前の保健の授業において、「生活習慣病とその予防」の範囲で既に学習していたためだと考えられる。

（2）の質問の正答率は35ポイント、（3）の質問の正答率は44ポイント上昇した。これらの質問に対して生徒は、「自分もなる可能性がある」ととらえ、がんは身近な病気であると感じたからだと考えられる。

（4）の質問の正答率は、25ポイント上昇した。検証授業で実施した内容を、概ねの生徒は理解したと考えられる。

（5）～（7）の質問の正答率は、約30～50ポイントと上昇を示し、検証授業で理解が深まったと考えられる。

（8）の質問の正答率は、11ポイント（９名）と増加する割合は少なかった。考えられる理由としては、授業の中では紹介する程度の内容となり、メモ等の指示もしていないことから、知識として習得するまでには至らなかったと考えられる。

１問を除く質問項目において、正答率が上昇する結果となった。がんの特性やがんを予防す

るための知識の習得が見られたことで、概ねの生徒はがんを自分事として考えるための基となる知識を習得できたと考えられる。

イ　がんを自分事として考え、認識を深めることができたか

図27は、事前と事後アンケートの「がんは自分に関係のある病気なので学ぶ必要がある」という質問（４件法）に対する回答割合である。

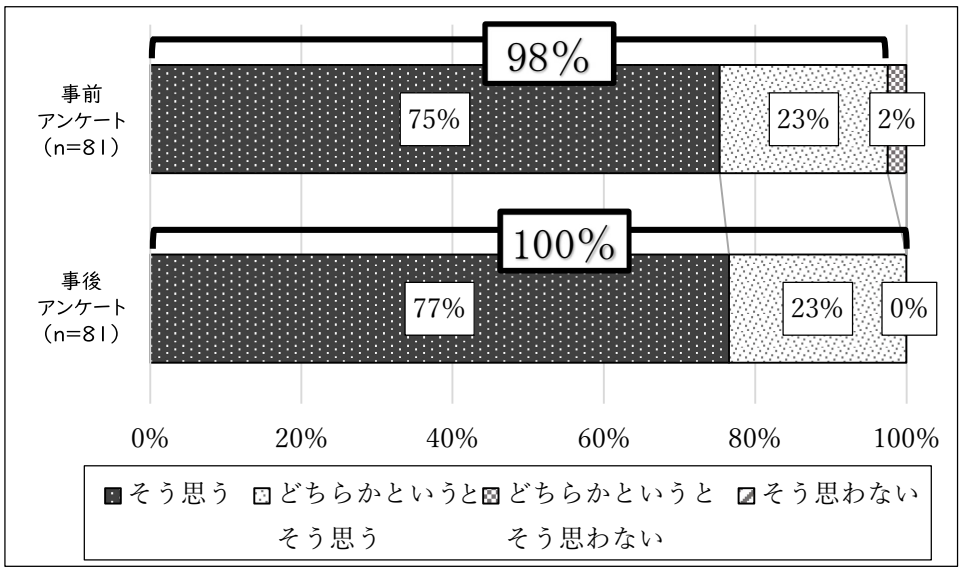


図27　「がんは自分に関係のある病気なので学ぶ必要がある」に対する回答割合の事前・事後の比較

図27を見ると、「そう思う群」の割合は、事前の98%から事後では100%と、もともと高い値を示していたものの、すべての生徒が、がんについての学習は学ぶ意義があると回答した。

図28、29は、事前と事後アンケートの「定期的に健康診断を受けようと思う」と「がん検診を受けられる年齢になったら、検診を受けようと思う」という質問（４件法）に対する回答割合である。

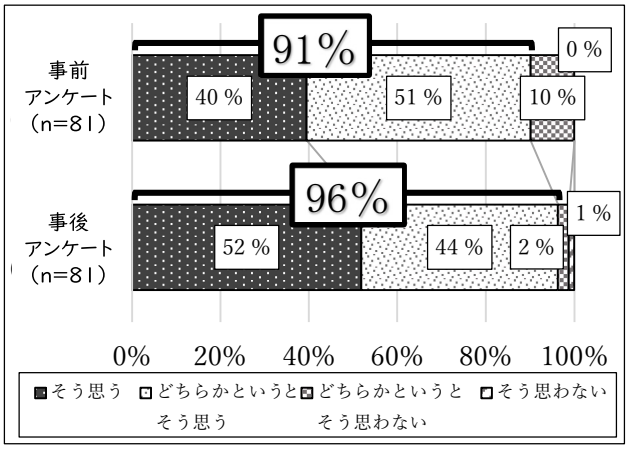


図28　「定期的に健康診断を受けようと思う」に対する回答割合の事前・事後の比較

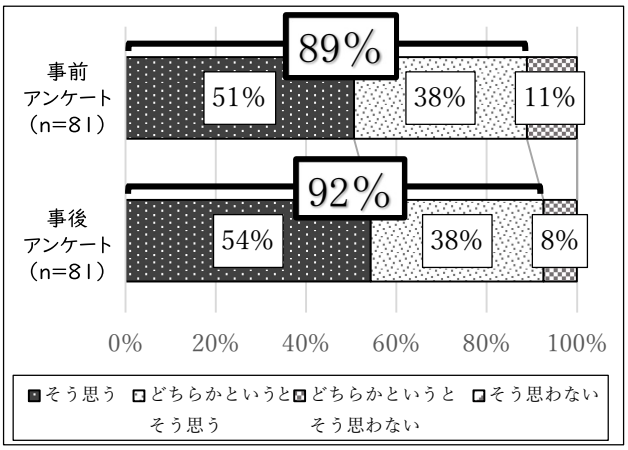


図29　「がん検診を受けられる年齢になったら、検診を受けようと思う」に対する回答割合の事前・事後の比較

図28を見ると、「そう思う群」の割合は、事前の91％から事後では96％と、高い値を示した。また、「そう思う」と回答した生徒は、事前は40％だったが、事後では52％と12ポイント（10名）上昇した。

図29においても、図28の回答結果と同様に、事前・事後の「そう思う群」の割合は高い値となり、生徒は健康診断やがん検診についても、多くの生徒がもともと関心をもっていたが、さらに関心が高まったことがわかった。

図30は、事前と事後アンケートの「自分の心がけや努力によって、がんを予防することができる」という質問（４件法）に対する回答割合である。

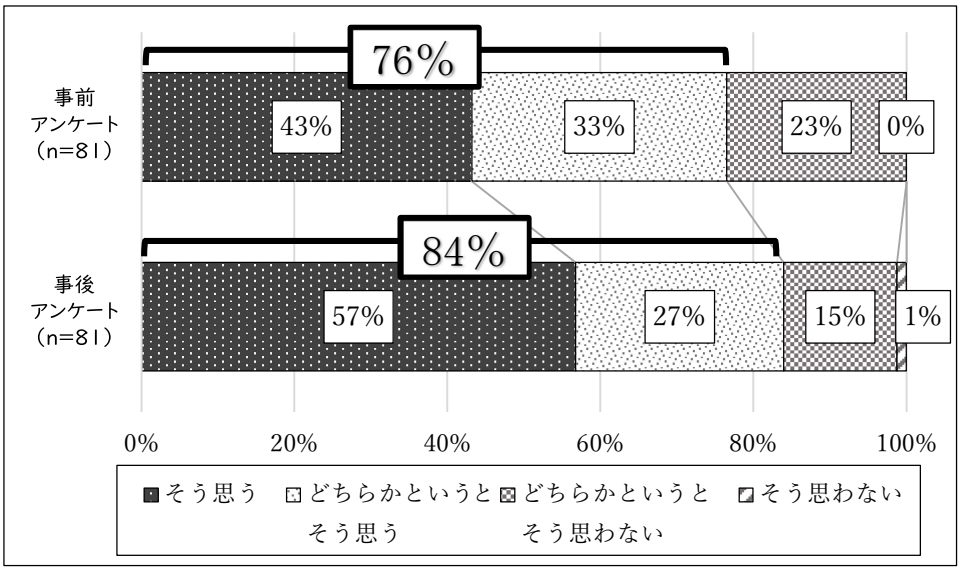


図30　「自分の心がけや努力によって、がんを予防することができる」に対する回答割合の事前・事後の比較

図30を見ると、「そう思う群」の割合は、事前の76％から事後では84％と、概ねの生徒が肯定的な回答を示した。

上記の質問に対して、「そう思う群」に回答した生徒のうち、「そう考えることができたきっかけ（理由や授業の内容）を書いてください。」という自由記述の回答を表12に示した。

表12　図30の質問で、「そう思う群」と回答した生徒に対する「そう考えることができたきっかけ（理由や授業の内容）を書いてください」の自由記述内容（抜粋）

（保健の授業がきっかけ）　45件 ・適度な運動を行い、栄養バランスに気を付けて、日々生活する。がんは２人に１人がなるので、みんなが気を付けていれば減らすことができる。 ・授業でがんの原因は大半が生活習慣で、がんの早期発見・早期治療で多くが治ると学んだから。
（道徳の授業がきっかけ）　８件 ・授業でがんにかかったひとの苦しさを聞いて、自分自身がちゃんと努力して体を守れるように頑張りたいです。 ・猿渡さんの映像を見て、普通に生きることが一番いいと思ったから。

（その他）　15件	
・病気はじわじわ痛みが来るのでいやだったから。	・がんになりたくないから。
・つらい思いをしたくないから。	

生徒は、保健で学習したことを中心に、考えを深めることができた記述がみられた。また、道徳の授業で学習したことがきっかけとなった記述も見られた。

本研究の保健の授業において、「生活習慣の改善」と「早期発見・早期治療」の内容を扱ったことで、自分の心がけや努力によって、がんを予防することができると考えられるようになったと考えられる。

しかし、図30のように、事後アンケートでは16%の生徒が、努力しても改善されない現実もあると感じており、がんの予防に向けて前向きになれない生徒もいたと考えられる。また、小児がんは発生要因がはっきりせず、努力しても罹ってしまう病気であることを知ったことで、努力する意味を見出せなくなってしまったものと考えられる。

図31は、毎授業の振り返り時に「身近な人に今日の授業のことを話そうと思いますか」という質問（４件法）に対する回答割合である。

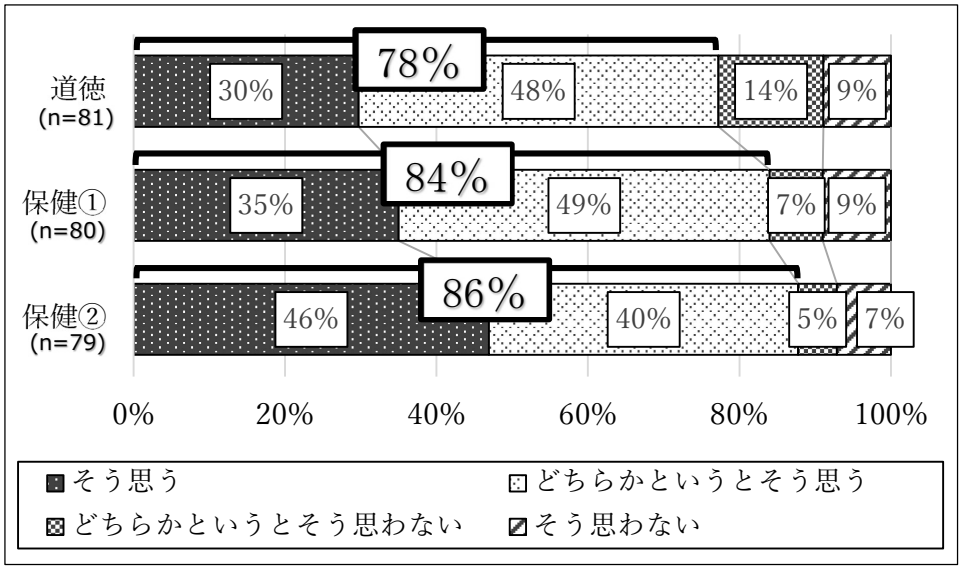


図31　「身近な人に今日の授業のことを話そうと思いますか」に対する授業ごとの比較

図31を見ると、「そう思う群」の割合は、１時間目の道徳の授業においては78%に対し、最後の保健の授業では86%であった。授業を進めていく中で、身近な人に伝えたいという気持ちが向上していることがわかった。

また、上記の質問に対して、「そう思う群」に回答した生徒と、「そう思わない群」に回答した生徒の自由記述を表13にまとめた。

表13　「身近な人に今日の授業のことを話そうと思いますか」と記述した内容（抜粋）

１時間目　道徳の授業	
「そう思う群」に回答した生徒	「そう思わない群」に回答した生徒
・（家族へ）家族と当たり前のように過ごせることがどれだけ幸せか。 ・（親へ）もしも自分がなったらどうするかを聞く。	・話の内容が深いので、話すのが難しい。 ・がんという暗い話をあまり出したくない。
２時間目　保健の授業	
「そう思う群」に回答した生徒	「そう思わない群」に回答した生徒
・（家族へ）バランスの良い食事をみんなで考えて食べること。 ・（父へ）たばこやアルコールなどもがんになりやすい確率が高くなることを伝えたい。	・悲しくなるから。 ・恥ずかしいから。 ・がんという暗い話をしたくない。しかし、気を付けてほしいので迷う。
３時間目　保健の授業	
「そう思う群」に回答した生徒	「そう思わない群」に回答した生徒
・（家族へ）がん検診や健康診断に行って、病気を早く見つけて、長生きしてもらいたい。 ・（親へ）がんの早期発見→95％治る。生活習慣の改善→６割予防。	・これを話すと空気が変になりそうだから。 ・話すことがないから。 ・家族はもう、今日の授業でやったことは知っていると思うから。

「そう思う群」に回答した生徒の多くは、家族に向けた記述が多かった。道徳の授業後の記述には、日々当たり前に過ごせることが幸せであることや、自分や家族ががんになってしまったらどのように接するかを記述している。保健の授業後の記述には、身近な人の日頃の生活習慣の話題に触れ、学習した内容の中から、予防方法や対策を記述する生徒もいた。これらの記述から、生徒は「がんの予防」に対し、家族の健康について考えることができた。

一方、「そう思わない群」に回答した生徒の中には、授業の内容を話すことで悲しくなり、雰囲気が重くなってしまうといった回答が見られた。また、生徒の中には、今回の内容を重く受け止め、伝える必要性はあるが言い出せない生徒もいることがわかった。

図32は、事後アンケートの「『がんの予防』について自分事として考えることができた」という質問（４件法）に対する回答割合である。

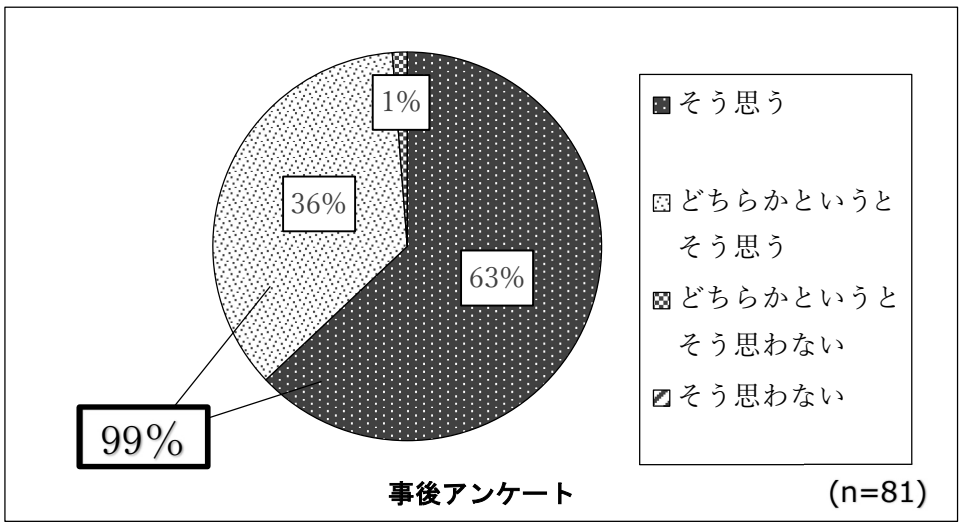


図32　「『がんの予防』について自分事として考えることができた」に対する回答割合

図32を見ると、「そう思う群」の割合は99％となり、ほぼ全ての生徒が、「がんの予防」を自分事として考えることができたと回答している。

本研究で行った３時間の授業は、主題に設定してある「がんの予防を自分事として考え、認識を深める保健の授業」として、有効に機能する内容であったと考えられる。

そこで、生徒は、がんを自分事として考え、どのように認識を深めることができたのか、「メッセージ活動」における記述内容の事前と事後の変容を見とり、検討することとした。

今回の３時間の授業では、検証授業前の事前アンケート実施時と保健の授業の２時間目の最後に、がんを自分事として考えるための活動として、「命を守るためのがんの予防とがんとの付き合い方について大切な人にメッセージを書こう」というテーマのもと、メッセージを作成する時間を設けた。

メッセージの作成にあたっては、事前に作成したメッセージを返却し、事前に作成したメッセージの用紙に書き足すことも可とした。このことで、３時間の授業で、がんの予防に対する認識の変容過程を生徒自らが感じ取ることもねらいとした。

そして、そのメッセージの変容から「がんの予防」の認識がどのように深まったかを分析することとした。

メッセージの回収状況については、表14に示すとおりである。

事前と事後メッセージの両方を提出した生徒79名のうち、図32「『がんの予防』について自分事として考えることができた」の質問に対して、「２（どちらかというとそう思わない）」と回答した生徒が１名、メッセージ対象者に「すでに亡くなってしまった人」に向けて記述している生徒が１名いた。したがって、この２名の生徒を除き、メッセージの内容を分析する対象生徒の人数を77名とした。

表14　事前・事後メッセージ回収状況

	事前メッセージ回収数	事後メッセージ回収数
２年１組（28名）	26名	26名
２年２組（29名）	27名	25名
２年３組（28名）	28名	28名
合計（85名）	**81名**	**79名**

表15　メッセージ対象者の割合

事前メッセージ対象者内訳 (n=81)	大人になった自分 67名	父 ４名	母 ８名	祖父母 ２名
事後メッセージ対象者内訳 (n=79)	大人になった自分 66名	父 ３名	母 ８名	祖父母 ２名

メッセージ対象者の割合は、表15に示したとおりである。思春期ということもあり、父や母に向けてメッセージを作成することに、恥ずかしいと思った生徒も多かったと考えられる。その結果、大人になった自分に向けてのメッセージが多くなったのではないかと推察される。

はじめに、生徒が書いた事前と事後のメッセージには、どのようなキーワードが使われているのか、概観することとした。図33は、テキストマイニング※により、事前と事後のメッセージの頻出単語を可視化した図である。

事前メッセージを記述した生徒81名と事後メッセージを記述した79名分のメッセージをＡＩテキストマイニングにかけたところ、図33のような結果となった。（一人の生徒が複数のキーワードを記入している場合も、それぞれカウントしている。また、生徒が記述したキーワードの出現回数が多いほど、文字が大きく表される。）

図33を見てみると、がんの予防の学習で学んだ内容や生活習慣に関する内容については、事前よりも事後で文字が大きくなったことから、事後の方がそれぞれの学習内容に関して意識が高くなったと読み取れる。また、「健康診断」や「検診」については、事前で小さく「健康診断」だけであったが、事後で「検診」が発現し、さらに「健康診断」の文字が大きくなったことから、今回の授業で学習したことが、メッセージに反映されたと考えられる。

※テキストマイニングとは、大量のビッグデータから重要な情報を抽出し分析する手法である（出典：企業ＬＯＧ）。また、図33は「ＡＩテキストマイニング（https://textmining.userlocal.jp/）」を活用し、文章中の頻出単語を可視化できるようにした。

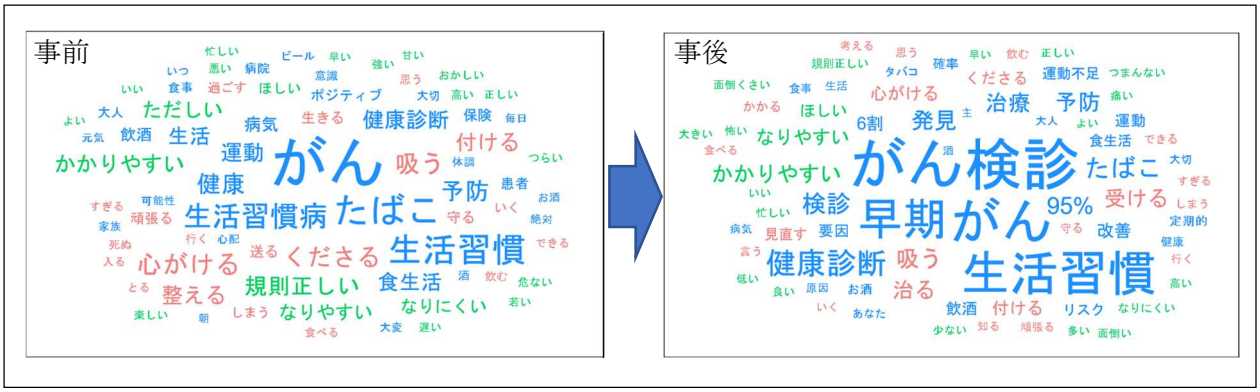


図33　テキストマイニングによる事前・事後メッセージの頻出単語の比較

次に、全生徒の事前と事後の「命を守るためのがんの予防とがんとの付き合い方について大切な人へのメッセージ」を読み、表16の「事前・事後のメッセージの内容の変容から、認識の深まりを見とる判断基準」を設定した上で、この基準に基づき「メッセージ活動」を検証することとし、筆者と当センター指導主事２名の計３名で分析した。

表16　事前・事後のメッセージの内容から認識の深まりを見とる判断基準

記述内容の観点	具体的な記述内容	認識の深まりを見とる判断基準
「がんの予防」に関する内容	・がんの要因 ・生活習慣　等	（ア）メッセージに新たな知見が加わったか （イ）メッセージがより具体的な表現となったか （ウ）メッセージに根拠が加わるなど、より理論的な表現となったか
「がんとの付き合い方」に関する内容	・健康診断 ・がん検診　等	

具体的なメッセージの変容例について以下のように示す。

（ア）「メッセージに新たな知見が加わったか」の例

＜事前＞がんにならないように気を付けてください。（特に分析の視点とは関係ない内容）

↓

＜事後＞もしもタバコを吸っていたらすぐにやめて、<u>生活習慣を改善して</u>がんにならないようにしてください。（学習した内容が新たに加わった）

（イ）「メッセージがより具体的な表現となったか」の例
＜事前＞規則正しい生活を送ってください。
↓
＜事後＞**バランスの良い食事**を心がけ、**適度な運動**を生活に取り入れましょう。

（ウ）「メッセージに根拠が加わるなど、より理論的な表現となったか」の例
＜事前＞体に少しでも違和感があったら、なるべく早く病院に行ってください。
↓
＜事後＞がんは早期発見して治療をすれば、**約95%が治る**から、年に一度くらいのペースで検診してね。

表17は、事前と事後の「メッセージ活動の記述の内容から、認識が深まったと判断した割合（記述人数）」を表したものである。

表17　メッセージの内容において、認識が深まったと判断した割合（n=77）

記述内容の観点	がんに対する認識が深まったと判断した割合（人数）	合計
「がんの予防」に関わる内容（がんの要因、生活習慣等）	16%（12名）	91%（70名）
「がんとの付き合い方について」に関わる内容（健康診断、がん検診等）	23%（18名）	
両方の内容を記入	52%（40名）	

表17を見てみると、メッセージの内容において、事前と事後を比較し、認識が深まった（表16「認識の深まりを見とる判断基準」に該当する内容）と判断できる記述をした生徒は91%おり、多くの生徒が、がんへの認識が深まったと考えられる。

次に、事前と事後のメッセージを比較して、特に大きな変容が見られ、認識が深まったと判断した部分を、筆者が下線・太字で加筆し、表18、表19に示した（一部抜粋）。

表18　「『がんの予防（がんの要因や生活習慣等を含む）』に関わる内容」について、特に変容が大きかったメッセージの内容

●メッセージに新たな知見が加わった内容
生徒Ａ（大人になった自分へ）
＜事前＞がんにならないように頑張ってください。
⬇
＜事後＞**飲酒や喫煙は肝臓がんや肺がんになったりするので、飲みすぎや吸いすぎには気を付けてください。**たとえ、がんになっても、それが早期発見なら治る確率は十分にあるので、その時はあきらめずに頑張ってください。

●メッセージがより具体的な表現となった内容
生徒Ｂ（母へ）
＜事前＞ちゃんと規則正しい生活を送って、がんにならないようにしてください。

⬇ ＜事後＞お酒の飲みすぎや生活習慣の乱れに気を付けて。症状が出ていなくても、定期的にがん検診に行き、がんにならないようにしてください。あとは、かたよった食事などをせず、バランスの良い食事を取って、がん予防してください。お酒の飲みすぎで胃がんにならないように緑茶を飲んでください。
●メッセージに根拠が加わるなど、より理論的な表現となった内容 生徒Ｃ（母へ） ＜事前＞お母さんへ、健康には気を付けてください。ビールとかもほどほどにしてください。 ⬇ ＜事後＞お母さんへ、健康診断はしっかりと受けてください。それに、飲酒は全部位、肝、大腸、結腸、直腸、食道のがんのリスクを上げることが確実なので、あまり飲みすぎないでください。あと、コーヒーは肝と子宮体部（内膜）のがんのリスクを下げます。ですが、熱い飲食物は食道がんのリスクを上げるので気を付けてください。あと、緑茶は女の人だと胃がんのリスクを減らします。

生徒Ａは、がんの要因や予防に関することについて、事前では特に記述はしていなかったが、事後では、３時間の授業を通して学んだ、がんになる要因とがんの関係性について説明する記述がみられた。

また、生徒Ｂ、Ｃは、母親に向けてメッセージを書いており、事前では、母親の気になる生活習慣に触れる程度の記述であったが、事後では、具体的に日頃の生活課題について言及し、保健の授業で学習した、がんのリスクを下げるデータ資料等を活用し、具体的な改善策について説明したメッセージの内容を記述していることがわかる。

表19　「『がんとの付き合い方について（健康診断・がん検診等を含む）』に関わる内容」について、特に変容が大きかったメッセージの内容

●メッセージに新たな知見が加わった内容 生徒Ｄ（大人になった自分へ） ＜事前＞がんなどの生活習慣病にならないように、生活習慣を気にかけて、見直していって、万が一のために保険に入って自分の身を守ってください。 ⬇ ＜事後＞がんにならないことが一番いいから、禁煙や節酒、食生活などのがんの主な原因となる生活習慣を気にして改善してほしいし、万が一がんになってしまったとしても、早期の発見・治療できるよう検診を受け、あきらめずがんに負けずに治してほしい。
●メッセージがより具体的な表現となった内容 生徒Ｅ（大人になった自分へ） ＜事前＞病院に行ってください。先生の言われた通りにしてください。 ⬇ ＜事後＞がんの検診か人間ドックなどをして、早期に発見できれば、助かる割合がとても高くなります。生活習慣や運動不足などに気を付けてれば、リスクが少なくなるので気を付けて。
●メッセージに根拠が加わるなど、より理論的な表現となった内容 生徒Ｆ（大人になった自分へ） ＜事前＞運動とかしっかりして、健康にいれるように頑張ってください。保険に入っておいてください。たまに体を見に行ってください（健康診断）。

⬇

＜事後＞主ながんの要因は、**生活習慣が１番の要因**なのでこのことを**改善できれば６割は予防できる**ので、もう今生活習慣が崩れているのなら、この生活習慣を直してください。次に**健康診断やがん検診でがんを早期発見、早期治療することによって95%の人が治る**ので、お金がかかるのが嫌だと思うので、**年に一度検診を受けに行ってみてください。**それでもし、がんになったとしても、前向きにとらえて病気と闘って勝ってください！

生徒Ｄは、事前では治療や検診等に関する記述は見られなかったが、事後では早期発見・治療や検診の必要性について触れている記述がみられた。

また、生徒Ｅは、事前では「病院に行ってください」としか記述していなかったが、事後では「がん検診・人間ドック・早期に発見」と記述しており、より具体的な表現となった。

生徒Ｆは、事前では、がんとの付き合い方についての記述は「健康診断」だけであったが、事後では「がん検診・早期発見・早期治療」といった授業で学んだ内容が追加されただけでなく、「早期発見・早期治療検することによって95％の人が治る」と具体的に説明している。また、検診の頻度についても記述しており、根拠が加わったメッセージへの変容となった。

さらに、生徒Ｄ、Ｆの記述には、「もしがんになってしまったら」という視点で前向きにとらえてもらえるような内容が書かれている。

一方、図32（p.41参照）「『がんの予防』について自分事として考えることができた」の事後アンケートにおいて、「どちらかというとそう思わない」と回答した生徒（１名）のメッセージの記述について、分析・検証を行った。この生徒は、大人になった自分に向けてメッセージを書いており、事前のメッセージでは、「がんになったら病院に行って寝ましょう。そしたらたくさんお金を借りて旅行に行って楽しんで終わる。」という記述内容であったが、事後のメッセージでは「健康診断とがん検診をたくさん受けてほしいと思いました。早期発見・早期治療。」という内容であった。これを見ると、今回の保健の授業で学習したことを整理し、がんの予防が自分事になったことで、検診と早期発見・早期治療の必要性を感じ、記述したと考えられる。

さらに、メッセージ対象者から外した、「すでに亡くなってしまった人」に向けて記述している生徒１名についての内容の記述には、がんで亡くなった祖父に対して、今回学習したことをいかして生活することや、学んだことを周りの人に伝えていきたいといった記述がみられ、自分や周囲の人のために何ができるか考え、亡くなった祖父に誓うようなメッセージであった。

また、生徒の事後メッセージの記述の中には、「他人事にしない」や「すごく身近な人がならないように」といった、自分や周囲の人に関わる内容を記述している生徒もいた。多くの生徒は、「がんの予防」が自分事となったことで、授業で学習したことを整理し、具体的にがんを予防するために何が必要なのかをメッセージに記述したと考えられる。

以上のことから、概ねの生徒は、がんの予防を自分事として考え、がんの予防に対する認識を深めることができたと考えられる。さらに、事前と事後のメッセージ活動を通して、生徒の思考の変容や知識の深まりがメッセージの内容を通して見えてきたことから、学習の定着や自己の考えを整理する活動として有効であると考えられる。

さらに、図34は、メッセージ活動で記述した内容の記入文字数を事前と事後で比較したものである。事前の一人当たりの平均文字数は59.1字だったが、事後では104.8字と大きく増加していた。これは、知識量が増えたことや、より自分事につながったことが要因であると考えられる。

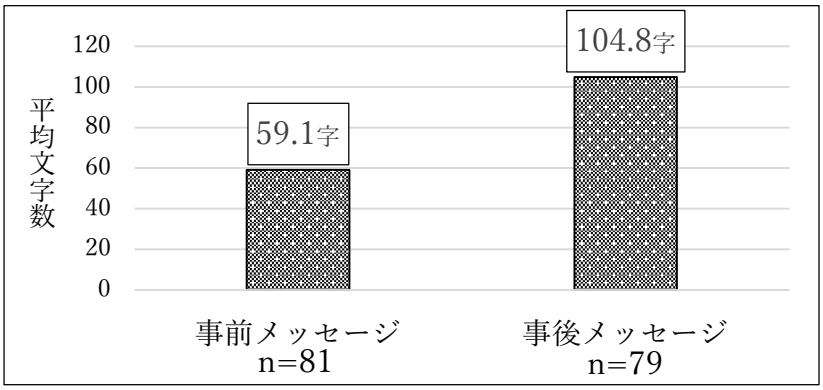


図34　平均文字数による事前・事後の比較

検証の視点「（３）生徒はがんを自分事として考え、認識を深めることができたか」のまとめ

・理解度チェックでは、１問を除く質問項目において正答率が上昇し、概ねの生徒は、がんを自分事として考えるための基となる知識の習得ができた。
・ほぼ全ての生徒が、「がんの予防」を自分事として考えることができた。
・事後のメッセージには、健康診断やがん検診の意義（早期発見・早期治療の有効性や必要性）を学んだことが多く反映されているなど、多くの生徒は、がんの予防に対する認識が深まった。

（４）仮説検証のまとめ

・道徳の授業では、同年代のがん患者の教材を活用することで、授業に対する興味・関心がこれまでの授業に比べて高まり、生命の大切さについて深く考えることができた。
・保健の授業では、「がんの予防」を学習する視聴覚教材（スライド、動画等）を活用し、授業に対する興味・関心がこれまでの授業に比べて高まり、がんの予防について深く考えることができた。
・概ねの生徒においては、道徳と保健の内容が結び付き、道徳の授業「生命の尊さ」が保健の授業「がんの予防」に有効に機能したが、一部の生徒には十分に機能しなかった。
・多くの生徒は、授業で扱ったがんの特性やがんの予防についての知識（生活習慣の改善や健康診断・がん検診の意義）を、事後のメッセージに反映させており、「がんの予防」を自分事として考え、認識を深めることができた。

第４章　研究のまとめ

１　研究の成果と課題

本研究では、「教科等横断的な視点により、道徳の授業『生命の尊さ』で、心情に働きかけた後に、保健の授業『がんの予防』を学習することで、がんを自分事として考え、認識を深めることができるであろう」と考え、授業を実施した。

その結果、がんの予防を自分事として考え、認識を深める上で有効に機能することが示唆された。そして、本研究の成果と課題を次のとおり整理した。

（１）教科等横断的な視点による学習過程の有効性

『新解説道徳編』において、「各教科等と道徳科の指導との関連を持たせた学習指導が大切である」（文部科学省　2017c　p.82）との記述から、本研究では、保健分野の「がんの予防」のねらいをより一層効果的に行うために、教科等横断的な視点による道徳と保健を関連させた授業を行った。

道徳「生命の尊さ」の授業の後の、保健「がんの予防」の授業の実施は、関連性を持たせやすく、生徒が自他の生命の大切さを自覚しながら、「がんの予防」を学習することにつながり、中学校におけるがん教育の要として有効に機能することがわかった。

しかし、道徳と保健が関連しなかった(結び付かなかった)と感じた生徒もいたことから、保健の授業において、道徳で学んだことを振り返ったり、想起させたりする活動や場面の設定が十分ではなかったと考える。

（２）同年代のがん患者を教材とすることの有効性

本研究は、生徒と同年代のがん患者を道徳の教材として活用した。同年代のがん患者の教材は、生命の大切さを改めて考えることができる機会になるとともに、同年代の対象生徒にとって、がんをまさに自分事として考える良いきっかけになったのではないかと考えられる。さらに、資料（作文）を読むだけでなく、本人の写真や音声（映像）、母親のインタビューが収録された視聴覚教材を活用したことで、授業に対する興味・関心が高まり、生命の大切さについて深く考えることに有効であったと考えられる。

（３）大切な人へのメッセージ活動の有効性

本研究の授業において、「がんの予防とがんとの付き合い方」について、授業前と授業後に、大切な人へのメッセージの作成（メッセージ活動）を行った。この活動は、がんについて生徒が自分事として考えるための手立てとなっただけでなく、思考の変容や知識の深まりがメッセージの内容を通して見えてきたことから、学習の定着や自己の考えを整理する活動として有効であり、がんに対する認識を深めることができる活動であることがわかった。

（４）がんを「家族の視点」で考えることの有効性

「中学生の時期は、比較的健康に毎日を過ごせる場合が多いため、自己の生命に対する有り難みを感じている生徒は決して多いとは言えない」（文部科学省　2017c　p.62）状況を踏まえ、本研究のように、中学生にがん教育を行う際は、がん患者が家族にいる状況を設定するなど、家族の視点で考える内容を盛り込むことが有効であると考える。

本研究においては、自分事の定義(p. 7参照)に照らし合わせ、道徳と保健の授業の双方に、家

族の視点を盛り込んだ。がん患者の母親のインタビュー動画を活用したり、「自分ががん患者の家族だったらどのように受け止め、どのような行動をとるか」や「自分だけではなく、身近な人(家族)のがんの予防の仕方」を考えさせたりするなど、家族の視点を授業に取り入れたことが、がんを自分事として考え、認識を深める上で有効であったと考える。

２　研究の成果と課題を基にした授業づくりのポイントの提案

本研究では、「教科等横断的な視点で道徳の授業と関連させ、がんを自分事として考え、認識を深める保健の授業づくりのポイントを提案する」を目的とし、授業の実践と仮説の検証等を行った。

そこで、前述の研究の成果と課題を踏まえ、次の授業づくりのポイントを提案する。

（１）道徳「生命の尊さ」、保健「がんの予防」、がん教育のそれぞれのねらいを明確にした上で授業を構想する。

『新解説道徳編（文部科学省　2017c　p. 62）』

『新解説保健体育編（文部科学省　2017b　p. 211）』

「がん教育の在り方（文部科学省　2015　pp. ２−４）」　参照

（２）道徳「生命の尊さ」の授業の後に、続けて（本研究では、約２～３日後）保健「がんの予防」の授業を実施する。

（３）道徳と保健の相互のねらいに関連する教材を作成（活用）し、保健の授業において、道徳で学んだことを振り返ったり、想起させたりする活動や発問等を意図的・計画的に取り入れる。

（４）道徳「生命の尊さ」の授業及び保健「がんの予防」の授業において、自分を含めた家族の視点で考える場面を設定する。

※がん教育で配慮を必要とする生徒への対応について

・職員への授業計画の周知及び協力要請を行う。

・配慮を要する生徒を把握する。（学年担任及び養護教諭等との連携）

・保護者への学習内容等の案内文書の作成、配付を行う。（資料編p. 38参照）

・当該生徒との面談及び当該生徒保護者への連絡を行う。

・授業実施時も、身近な人をがんで亡くしていたり、闘病していたりする可能性もあることを踏まえて、絶えず生徒の様子を観察し、生徒の気持ちに寄り添った対応に留意する。

３　今後の展望

（１）特別の教科道徳の内容で、小児がんを扱うことについて

今回の研究では、生徒と同年代の小児がん患者の教材を活用した。インパクトがある内容で、心に響く教材であったが、「小児がん」と「一般的ながん」を区別する内容を教える難しさがあった。また、小児がんになってしまう要因には、原因がわからないものがほとんどであり、そのマイナスイメージが強く残ってしまう生徒も見られた。さらに、今回活用した道徳の教材の小児がん患者は、作文を発表した２か月後に亡くなっており、命を失った方を教材としてどのように扱うことが適切なのか、検討する必要があると感じた。

また、保健の授業では、生活習慣が起因するがんを主に扱うことから、同年代のがん患者の教材だけでなく、一般的な大人のがんも扱った教材を活用すると、より効果的であると考えられる。

（２）がん教育を保健体育と他教科の「教科等横断的な視点」で行うことへの期待

「がん教育の在り方」の学校におけるがん教育の目標は、「がんについて正しく理解することができるようにする」と「健康と命の大切さについて主体的に考えることができるようにする」が示されている（p. ４参照）。また、『新解説保健体育編』の保健分野の学習内容に「がんの予防」（文部科学省　2017b　p. 211）が新たに登場し、がんについて正しく教えることとなり、今回、これらに示されていることを踏まえ、授業づくりを行ってきた。がんについて学習することは、生徒のこれから先の人生を考えると、必要な学習であることを改めて実感した。学校におけるがん教育をより充実し、効果的なものにするためには、保健の授業だけでなく、教科等横断的な視点でアプローチすることが、有効な手立てになると考える。道徳に限らず、総合的な学習の時間や特別活動との関連も視野に入れることで、がん教育の行い方に広がりが出てくるのではないだろうか。

今後、学校全体によるがん教育の推進に貢献していきたい。

（３）がんを学ぶことについて（授業を通して見えてきたこと）

図35～38は、保健の授業において、「本時のねらいが達成できた」かに対する各種の回答割合であり、ほとんどの生徒が授業のねらいを達成できたと回答している。

しかし、３つのねらい（図36～図38）の回答割合がほぼ100％に近いのに対し、図35の「がんがどのような病気か理解する」に対する回答割合は88％（71名）を示しており、指導の改善の余地があると考える。

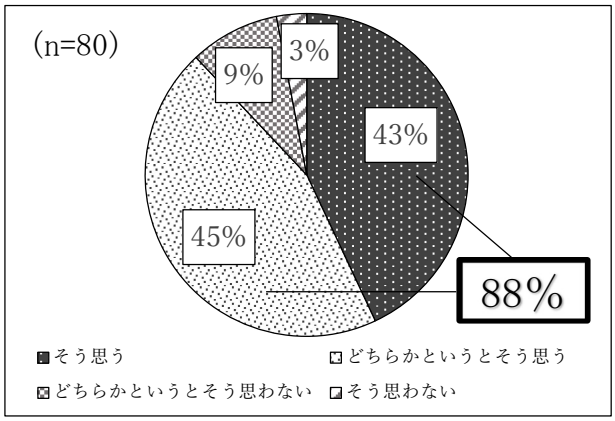


図35　「がんがどのような病気か理解する」に対する回答割合（保健の授業の１時間目のねらい）

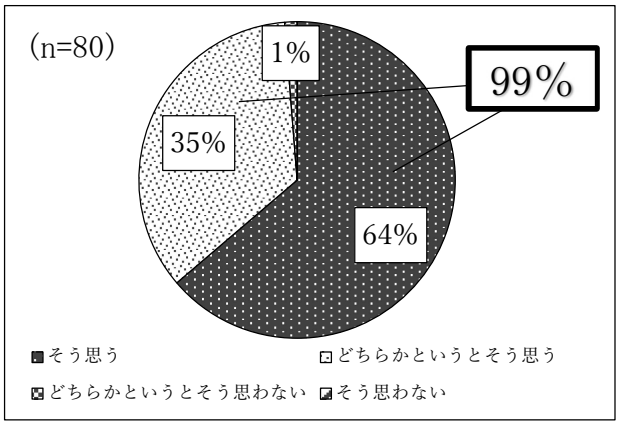


図36　「がんの発生要因を考えよう」に対する回答割合（保健の授業の１時間目のねらい）

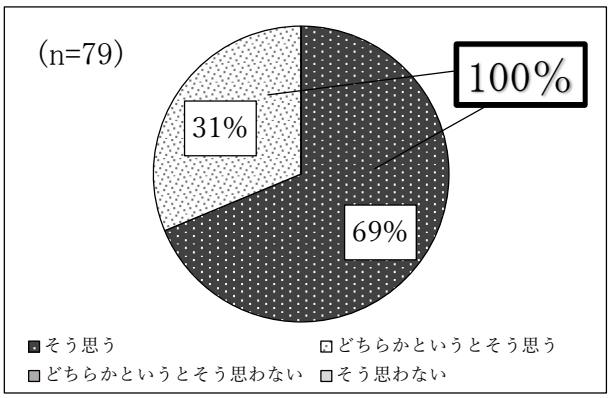


図37　「がんを予防するためにできることを考えよう」に対する回答割合（保健の授業の２時間目のねらい）

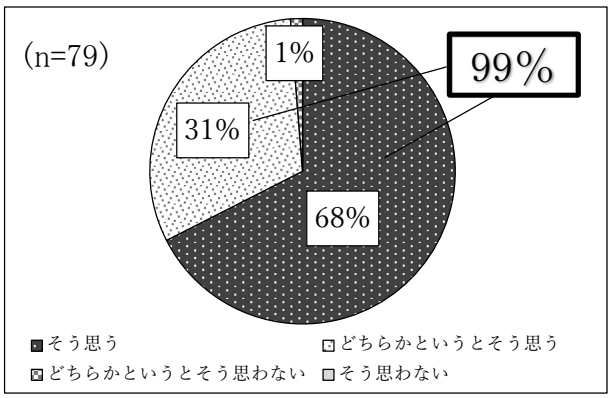


図38　「がんとの付き合い方について考えよう」に対する回答割合（保健の授業の２時間目のねらい）

今回の授業は、多くの資料・データの中から『新解説保健体育編』に記載されている指導内容（p. 6「㋑がんの予防」参照）と照らし合わせながら、必要な部分を取捨選択した。筆者としては、もっと掘り下げて教えたい部分は数多くあったが、図35の結果から、保健の１時間という時間の中だけで、「がんがどのような病気か理解する」を教えることは難しいと感じた。また、保健「がんの予防」を指導する際は、図35～図38のそれぞれのねらいを達成するためにも、今回のように、保健の授業を２時間以上で計画することが、必要な時間数であると考える。

さらに、新解説保健体育編に示されている知識として習得すべき内容と、生徒が知りたいと思っている内容は、必ずしも一致するわけではない。今回の検証授業を通して、図24・表８（p. 34参照）の回答にもあるように、生徒はさらに「知りたい」と思うことが出てきたことで、将来の健康への関心が高まるきっかけを得たと感じている。生徒の既存の知識の差も考慮し、何を教えなければならないかをしっかりと見極め、生徒の実態に合わせた学習内容の精選、生徒の興味・関心を引き立てる教材研究・開発や学習活動の工夫、授業時数の確保等も考慮に入れ、今後の指導にいかしていきたい。

（４）学校現場における「がんの予防」に関する情報のアップデート

授業でがんを取り扱う際は、日々更新されるがん情報を、よりリアルタイムに適切な内容と表現で伝えていく必要があると考える。しかし、我々は医師ではないため、生徒にわかりやすい表現を用いて授業に臨まなければならない。今回、神奈川県が作成したがん教育のスライド資料を中心に活用し、授業実践をしたことで、伝えるべき内容の広さや深さの重要性、表現の仕方等の難しさを感じた。がんを学習することについて、多くの先生方と情報を共有し、最新の情報でがんについて教えることで、生徒に身に付けさせたい力を着実に定着させることができると感じた。

（５）新指導要領全面実施に向けてのきっかけとして

筆者は、健康課題に触れながら、様々な疾病の情報と合わせて、「がんの予防」を教えていくことが、これからの保健分野で求められてくると考える。がん教育についても授業研究や授業実践が徐々に増えてきている中、まだ「がん」について授業で扱うことに抵抗を感じている先生方も少なくないと感じる。

また、図39は、生徒の実態調査アンケートにおいて、「あなたが将来的に心配している『健康への不安や病気』には、どのようなものがありますか」という質問の、自由記述の回答結果であ

る。（質問に対して複数回答している生徒もおり、回答したキーワードをそれぞれカウントした。）

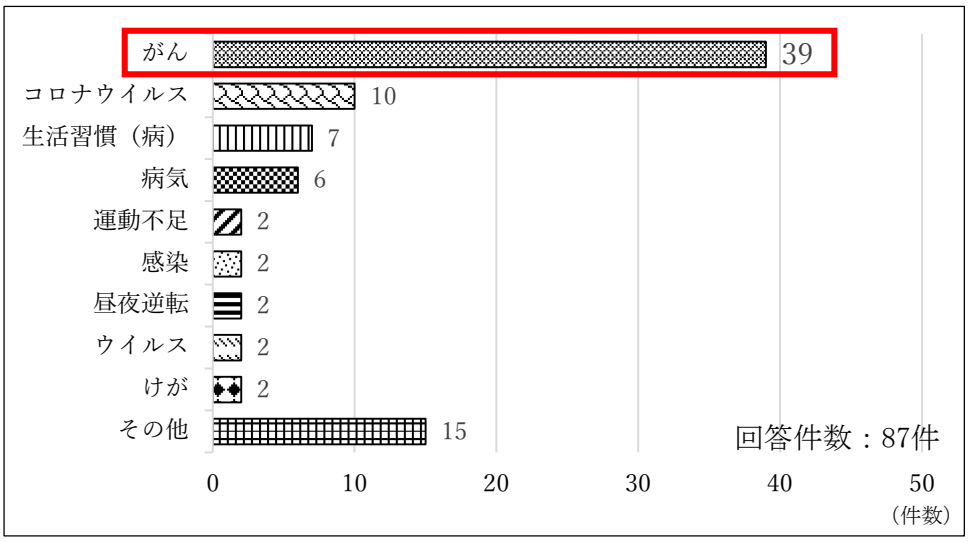


図39　「あなたが将来的に心配している『健康への不安や病気』には、どのようなものがありますか。」に対する回答（複数回答）

回答結果のうち、39件が「がん」と回答している。新型コロナウイルス感染症が注目される現状でありながら、生徒は「がん」について最も心配しているという結果になった。よって、本研究で扱う「がんの予防」は、生徒にとって興味・関心がある内容であり、将来の健康への不安を、授業を通して解消し、がんについて前向きに考えることができたと考える。授業後の振り返りをみると、「病気の中で一番学びたかったのが、がんだったので、すごく勉強になった」「今までがんになったら死んでしまうというイメージがあったが、今日で生活習慣を見直せば６割が予防できると知り、考え方が変わりました」などの記述が見られ、生徒にとって意義のある学習内容となったと手応えを感じている。今後も、よりよい学校におけるがん教育の在り方を具体的に考えながら、授業づくりに取り組んでいきたい。

最後に、今回の研究が、がんの授業に不安を抱いている先生方の参考に少しでもなればと考え、がんの予防の「授業づくりのポイント」として提案させていただいた。ぜひ、有意義な保健体育教育の実現に向けて、生徒のことを第一に考え、実りある授業実践が増えていくことを期待している。

謝辞

最後になりましたが、本研究を行うに当たり、大変お忙しい中、検証授業の準備から実施まで多くのご協力をいただいた茅ヶ崎市立西浜中学校の校長先生をはじめ、第２学年所属の先生方、保健体育科の先生方、教職員の皆様に心より感謝申し上げます。

また、専門的な見地から様々なご指導・ご助言をいただいた、聖心女子大学の植田誠治氏、横浜国立大学の物部博文氏、神奈川県教育委員会子ども教育支援課・保健体育課、湘南三浦教育事務所、茅ヶ崎市教育委員会の指導主事の方々に感謝申し上げます。

そして、検証授業を真剣に取り組んでくれた西浜中学校第２学年の生徒たちと、協力してくださった保護者の皆様に感謝いたします。ありがとうございました。

［引用・参考文献等］

厚生労働省 2007 『がん対策推進基本計画』https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-10900000-Kenkoukyoku/gan_keikaku03.pdf（2020年12月１日取得） p.３
厚生労働省 2012 『がん対策推進基本計画（第２期）』https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-10900000-Kenkoukyoku/gan_keikaku02.pdf（2020年12月１日取得）
厚生労働省 2017 『がん対策推進基本計画（第３期）』https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-10900000-Kenkoukyoku/0000196973.pdf（2020年12月31日取得）
茅ヶ崎市教育委員会 2020 「新型コロナウイルス感染症対策と学校運営に関するガイドライン～学校における新しい生活様式の定着に向けて～（令和２年７月）」
中央教育審議会 2016 『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)』 https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/__icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf（2020年12月1日取得） p.28
文部科学省 2015 『学校におけるがん教育の在り方について（報告）』 https://www.mext.go.jp/a_menu/kenko/hoken/__icsFiles/afieldfile/2016/04/22/1369993_1_1.pdf（2020年12月１日取得）
文部科学省 2017a 『中学校学習指導要領(平成29年告示)』 東山書房
文部科学省 2017b 『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説保健体育編』 東山書房
文部科学省 2017c 『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説特別の教科道徳編』 教育出版
文部科学省 2020 「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料　中学校保健体育」
植田誠治 2018 「なぜいま学校におけるがん教育なのか」「がん教育の系統性、外部講師の積極的活用、がんの当事者などへの配慮」（『学校におけるがん教育の考え方・進め方』 大修館書店）
物部博文・杉崎弘周 2018 「各校種におけるがん教育の展開例」（『学校におけるがん教育の考え方・進め方』 大修館書店） pp.106-107